



史跡

平出遺跡

—平成19年度史跡等総合整備活用推進事業に係る発掘調査概報—

2009年3月

塩尻市教育委員会

史 跡

平 出 遺 跡

—平成19年度史跡等総合整備活用
推進事業に係る発掘調査概報—

目 次

1	発掘調査の目的と方法	1
2	発掘調査の経過	3
3	遺跡の層序	3
4	調査概要	4
5	遺構と遺物	7
6	古代の平出遺跡	27
7	「古代の農村」平安時代地区の整備計画	31
8	まとめ	35

例言・凡例

- 1 本書は、史跡平出遺跡史跡等総合整備活用推進事業に係わる発掘調査報告書である。
 - 2 発掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、塩尻市教育委員会が実施した。
 - 3 発掘作業は、平成19年7月19日から平成20年3月24日まで行った。
整理作業は、平成20年7月8日から平成21年3月31日まで行った。
 - 4 調査指導
塩尻市史跡平出遺跡整備委員会
委員長 戸沢充則 (明治大学名誉教授)
副委員長 桐原 健 (長野県文化財保護審議会委員)
委 員 小林達雄 (國學院大學名誉教授)
宮本長二郎 (別府大学客員教授)
佐々木邦博 (信州大学教授)
辻 誠一郎 (東京大学教授)
 - 5 本書の執筆・編集
小林康男、塩原真樹、竹原久子、西窪美穂、三村孝子
 - 6 本報告書に係る出土品・諸記録は、塩尻市立平出博物館で保管している。
 - 7 本報告書の縮尺率は遺構図 1/60 を基本としている。
 - 8 古代の土器分類は、『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』4—松本市その1 総論編に基づいて行った。
-



調査区全景

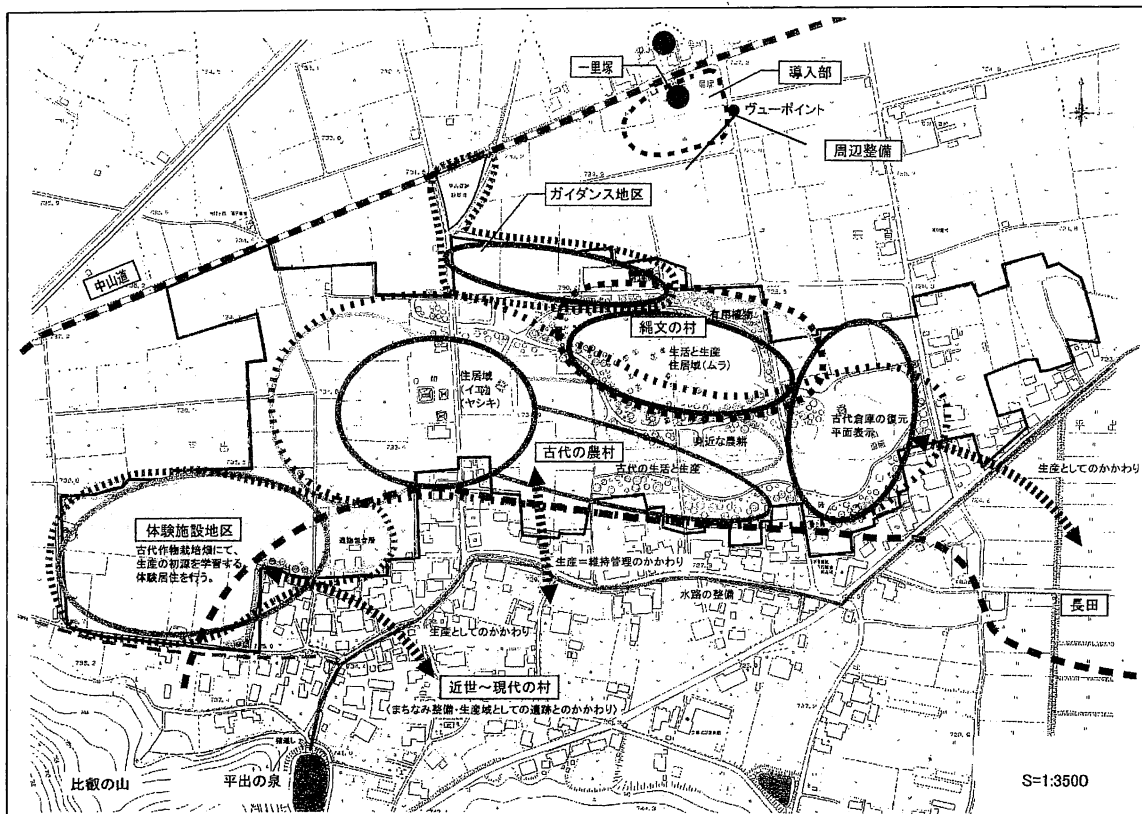
1 発掘調査の目的と方法

(1) 発掘調査の目的

昭和 27 年に国史跡に指定された平出遺跡は、昭和 52 年、「史跡平出遺跡保存管理計画書」が策定され、永久保存地区・現状変更許容地区のエリア設定、用地の公有化および整備・活用の推進など保存管理の基本的方針が決定された。

この計画に基づき、塩尻市では、平成 9 年度から平成 22 年度までの継続事業として永久保存地区を中心とした約 7.3ha の用地の公有化事業に着手した。また、平成 11 年度には塩尻市史跡平出遺跡整備委員会（委員長 戸沢充則）を発足し、整備・活用計画の検討を進め、平成 13 年度に整備基本計画を策定した。整備基本計画では、平出遺跡およびその周辺を、「導入部」「縄文の村地区」「古代の農村地区」「ガイダンス地区」「体験学習施設地区」の 5 地区を設定した。整備は、平成 15 年度から年次計画により、「縄文の村地区」「ガイダンス地区」「古代の農村地区」の順に進めることになり、平成 15 年度から行った。17 年度にかけて「縄文の村地区」の整備、平成 18 年度には「ガイダンス地区」の整備、平成 19 年度は「古代の農村」古墳時代地区の竪穴式住居を 1 棟、さらに今年度は同地区の高床式倉庫 1 棟の建築を整備を進めるにあたっては、発掘調査を整備の重要な要素と位置づけ、「各時代の集落構造・社会構造の解明」を目指し、「整備対象遺構の選定資料」を得ることを目的としている。発掘調査では、①遺構・遺物の状況の把握、②時代別の特徴の把握、③「平出の地」の重層性の明確化、④史跡整備に必要な情報の整理を主たる調査項目にあげている。

発掘調査は整備の第 1 段階にあたり、「遺構確認の必要な地区に対し発掘調査を行い、その成果を踏まえ各地区を順次整備していく」とし、発掘調査結果を基にして整備計画を策定することになっている。



第 1 図 平出遺跡整備エリア図

(2) 発掘調査区域の設定

発掘調査区域の設定にあたっては、公有化が完了した区域であり、且つ整備年次別計画の順序に基づき設定している。

平成 19 年度の発掘調査区域は、「古代の農村」整備地区にあっている。「古代の農村」地区の整備基本計画では、「復元住居を数棟設けることで古代の農村集落を表現する。また、農耕地区の整備により当時の生活環境を表現し、集落と農耕地区を合わせ古代の農村空間を来訪者に伝える。」としている。この「古代の農村」地区は、古墳時代と平安時代の集落復元が予定されており、今回の調査区は平安時代の集落を復元するエリアとなっている。このため発掘調査では、復元住居の対象遺構や集落構成を再現するための資料や植生、旧地形の復元のための基礎資料を得るという目的のもと、必要最小限の発掘調査区域を設定した。

今回の調査区の設定にあたっては、平成 17、18 年度の平出遺跡で行われた発掘調査の成果に基づき、両年度の調査区の間にあたる場所を調査区域として設定した。

発掘調査の方法としては、より多くの情報を得るため表土からすべて人力による掘り下げを行い、なるべく高い位置での遺構の検出に努め、当時の地形復元を行う観点から生活面を把握することに重点をおいた。調査にあたっては、表土除去作業開始前に東西、南北にベルトを設け、現地表面から遺構検出面までの土層観察用を行えるようにし、このベルトは土層観察等の調査終了後も取り外すことなく、将来の調査において再検討できるよう配慮した。遺構調査においても同様な調査方法をとった。

また、ピットや土坑の調査では、一部を半裁して記録をとるに留め、完掘は行っていない。今回検出された縄文時代の J-70 号住居址に関しては、整備対象時期と異なることもあり、詳細な調査は行わず埋め戻した。このように調査では今後の再調査も念頭に置き、必要最低限の調査にとどめたため、検出住居址以外の土坑等、調査区内に未掘部分も多く残されていることを明記しておきたい。

遺物の取り上げに関しては、住居内から出土した遺物については出土場所と高さを記録して取り上げ、遺構外出土の遺物に関しては、小グリッド単位で取り上げを実施した。

住居址等の遺構の埋め戻しは、内部に遺構保護のため砂を一定の厚さまで入れ、その上に土を入れる方法をとった。

調査にあたり区域内に設定したグリッドは、平出遺跡内に設定してある 30m 方眼の大グリッドを基準にしており、この大グリッドを東西及び南北に 10 分割して 3m 方眼の小グリッドを設定している。グリッドの呼称は、東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットとし、アルファベットは小文字で表記している。

記録は、遺構平面図、遺構セクション図については、原則として 1/20 の縮尺で行い、遺物出土状況図などは 1/10 の縮尺で行った。遺構写真は、35 mm のカラーリバーサルとデジタルカメラを使用した。

2 発掘調査の経過

発掘機材の搬入および調査対象区域内において調査区の設定を行い、発掘調査を開始する。なお、調査に関する作業はすべて人力で行った。最初に着手した作業は、設定された調査区の表土除去作業である。この耕作土である表土は 15～25 cmほどあり、遺物も頻繁に出土したため、作業はより慎重に行われた。表土除去作業が終了し、暗褐色土層および褐色土層が現れ、これらの土層内に遺構検出面が存在していた。遺構検出作業では、現在ではほぼ平坦にみえる地形も旧地形は多少起伏があったことがわかるなど、人力作業により表土から掘り下げを行ってきた成果といえる。

遺構検出作業により判明した遺構のうち、整備対象となる古代の住居址を主体に調査を実施した。住居址の調査は通常の調査同様、セクションベルトを設定してから掘り下げを行い、遺物は出土状況の記録をとってから取り上げを行った。セクションベルトは取り外さず、ピットやカマドに関しても半裁して記録をとるに留めた。

住居址完掘後は写真や平面図等の記録を取り、調査区周辺も含めた全景写真はラジコンヘリにより空中から撮影を行った。

すべての調査を完了した時点で埋め戻しを行ったが、埋め戻しの際には遺構内に砂を入れ、遺構保護層を設けた。その後バックホーを使用して調査区内の埋め戻しを実施した。

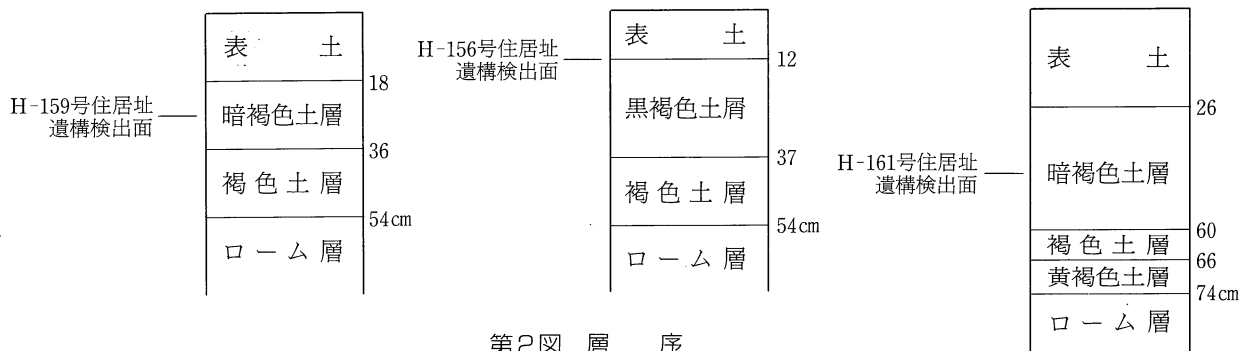
3 遺跡の層序

発掘調査区域周辺は、現況では農地として利用されていたこともあり、ほぼ平坦な印象を受けるが、旧地形では西側から東側に向けて緩やかな傾斜と若干の起伏がみられていた。

基本層序としては、表土（耕作土）→暗褐色土層→褐色土層（漸移層）→ローム層となり、耕作が浅い場所では部分的に黒褐色土層が堆積していることが確認された。

今回の史跡整備にもなった発掘調査では、遺構の掘り下げがどの面から行われているのか、当時の生活面がどの位置にあったのか把握することに努めた。調査を進めた結果、暗褐色土層から住居址の掘り込みが確認され、暗褐色土層内を中心に古代の生活面が存することが確認された。

このような成果にもとづき、史跡整備にあたっては当時の生活面を基準とし、保護のための盛土厚を算定することとした。



第2図 層序

4 調査概要

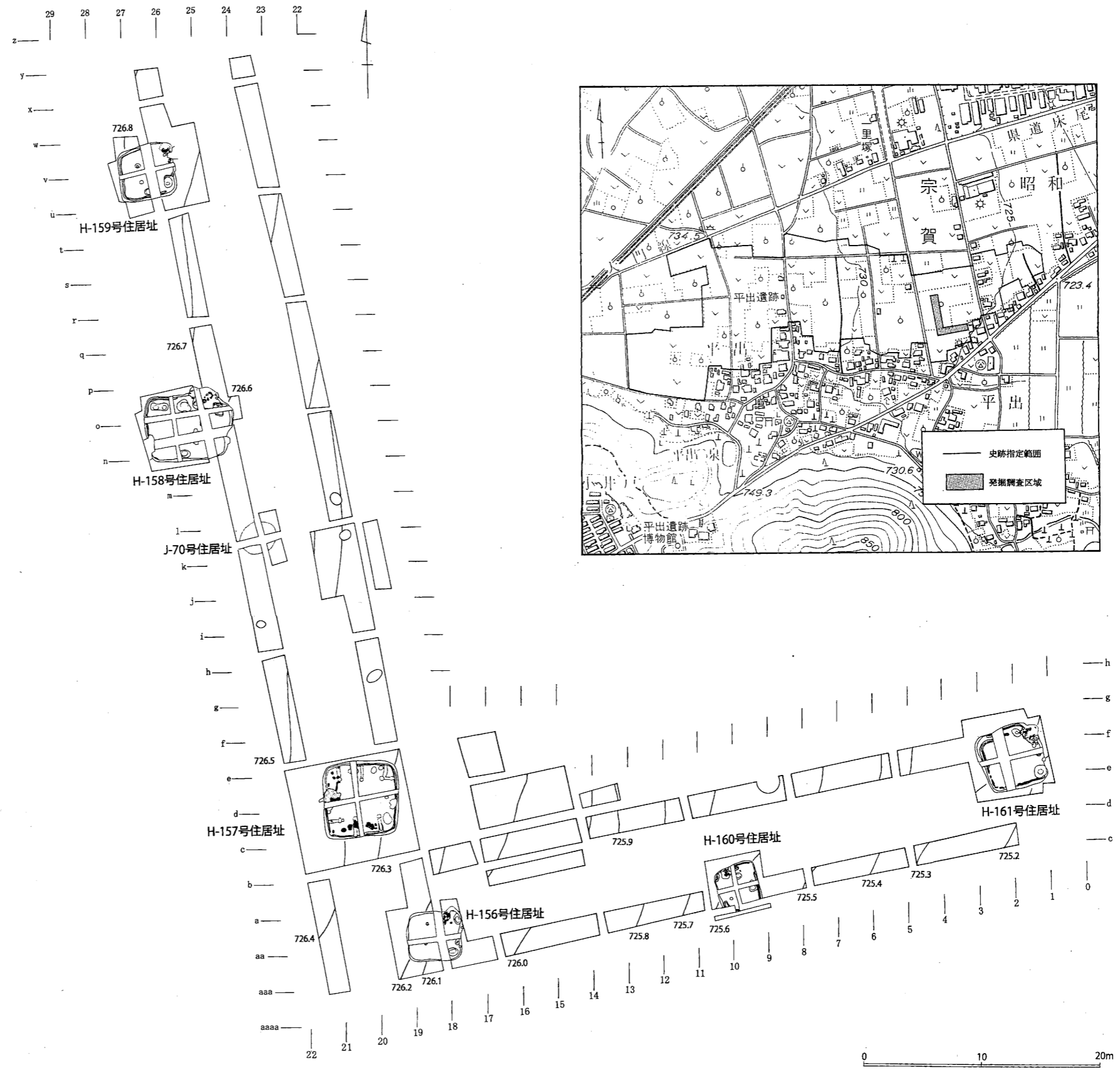
平成 19 年度調査地区は「古代の農村」の平安時代整備地区にあたり、1,000 m²の範囲で調査が行われた。その結果、縄文時代 1 軒、古墳時代 1 軒、平安時代 5 軒の住居址が検出された。

今回発掘調査を実施するにあたっては、平安時代の住居址はもとより、平安時代に属するような掘立柱建物址などが検出されることも期待されたが、実際には住居址以外に平安時代に属する遺構を発見することはできなかった。しかし、見つかった 5 軒の平安時代の住居址は、いずれも 11 世紀前半に属するもので、これは平成 17、18 年度の調査で見つかった住居址と同時期であることが確認された。また、1 軒検出された古墳時代の住居址も、平成 17、18 年度の調査時に見つかった古墳時代の住居址とほぼ同時期のものと分かった。

このように今回の発掘調査では、平成 17、18 年度調査によって確認された古墳時代と平安時代の集落がさらに広がっていることが分かった。この結果は同時代の今後の平出集落を研究するうえで大いに役立つであろう。

第 1 表 平成 19 年度発掘調査検出遺構一覧

遺構名	所属時間	形態	規模(m) 南北×東西	火処	主要出土遺物	備考
H-156号住居址	平安時代 (11世紀前半)	隅丸方形	4.15×4.64	石組カマド (北壁東)	土師器杯、黒色土器椀、灰釉陶器段皿・椀・小瓶・壺、鉄製紡錘車	
H-157号住居址	古墳時代 (6世紀前半)	隅丸方形	6.38×6.32	粘土カマド (西壁中央)	土師器杯・甕・瓶、黒色土器杯 ミニチュア土器	カマド、ピット 未掘
H-158号住居址	平安時代 (11世紀前半)	隅丸 長方形	5.6 × 6.5 (6.28×7.6)	石組カマド (北東隅)	土師器杯・盤、黒色土器椀 灰釉陶器皿・椀、鉄製品	
H-159号住居址	平安時代 (11世紀前半)	隅丸方形	4.68×4.65	石組カマド (北東隅)	土師器杯、灰釉陶器椀、鉄釘、 鉄製品	
H-160号住居址	平安時代 (11世紀前半)	隅丸方形	3.8×3.6	石組カマド (北壁西)	土師器杯、黒色土器杯・椀 灰釉陶器椀	
H-161号住居址	平安時代 (11世紀前半)	隅丸方形	4.48×5.22	石組カマド (北東隅)	土師器杯・小型甕、灰釉陶器椀 段皿、土製円盤	
J-70号住居址	縄文時代 中期初期	円形	2.7×3.2	不明	縄文中期初頭土器片	未調査



第3図 発掘調査区全体図 (S=1:4000)

5 遺構と遺物

H-156号住居址 (第4・5図)

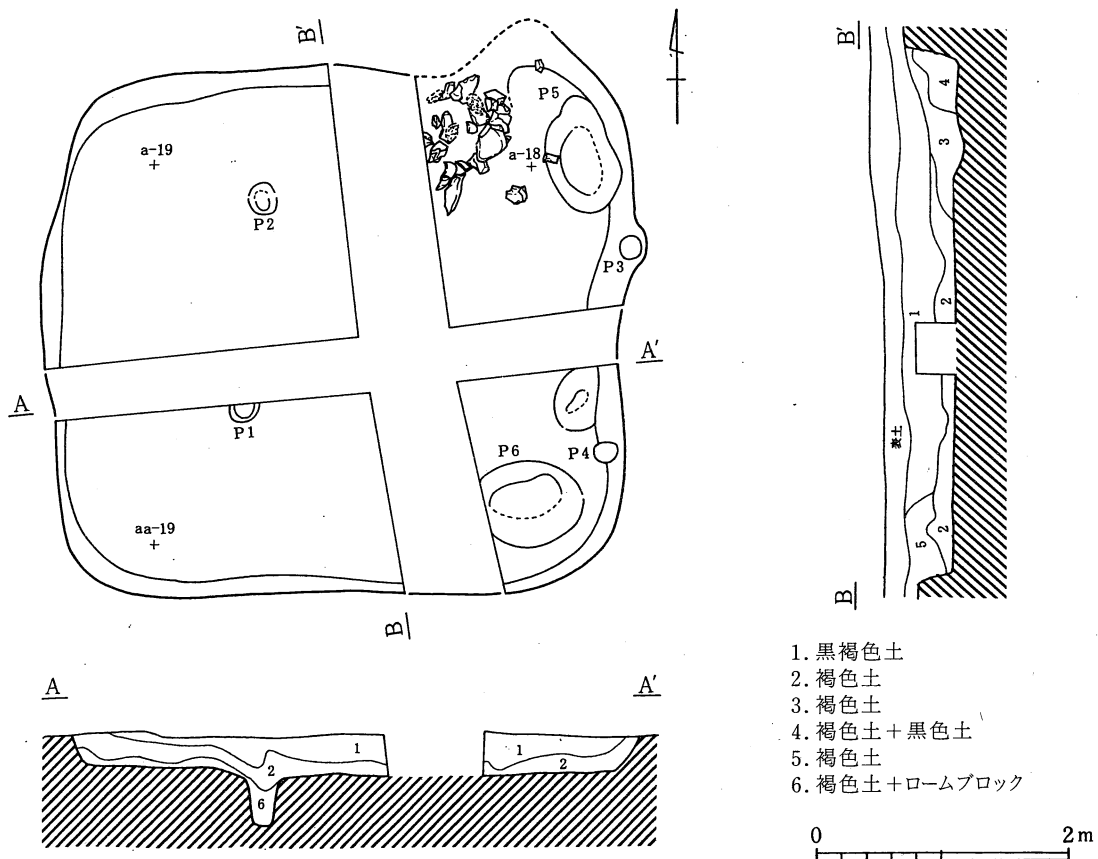
遺 構 本址は調査区南西、aa・a-18~19グリッドに位置する。地表面より25cm下位において、褐色土層の中に黒褐色をした住居の輪郭が確認され、ローム層より12cm上位で検出することができた。住居址プラン確認後、東西南北にベルトを設定し、掘り下げを行った。

本址の規模は、南北4.15m、東西4.64mを測る、隅丸方形プランの住居址である。壁高は検出面より16~47.5cmで、南西区画がやや低くなっており、立ち上がりは急で、壁下に周溝は確認されなかった。北壁やや中央東寄りに石組みカマドが検出されたが、一部崩落しており、西側半分もベルト内にあるため詳細は不明である。内部にはわずかに焼土の堆積も確認された。床面は全体に堅いが、西側は締まりが悪く、後世に荒らされた可能性も考えられる。

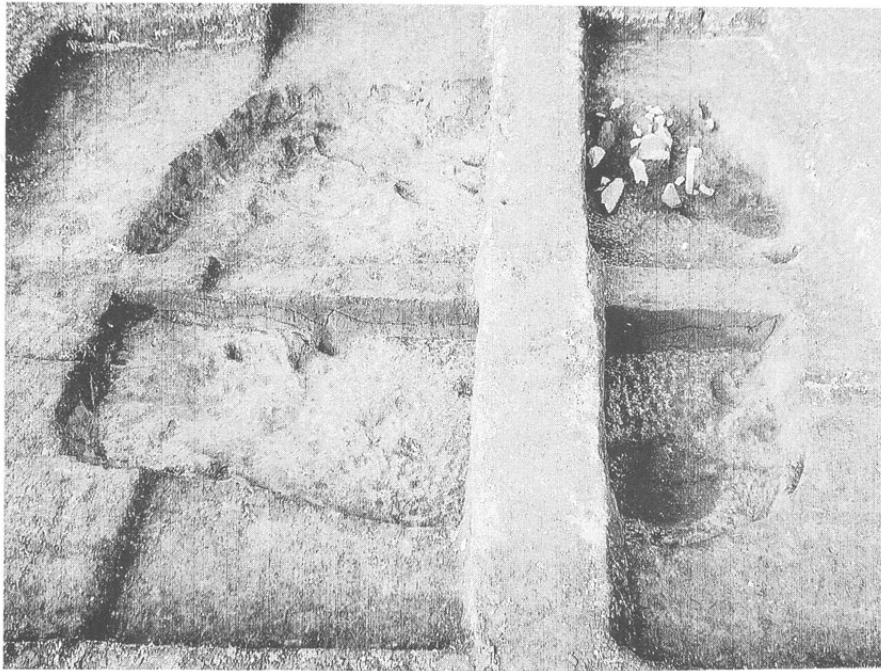
住居址内には、6カ所のピットが確認されており、深さ30cm前後のP1~P4が位置的に多少ずれはあるが、支柱穴と考えられる。これらの柱穴は径20~24cmを測る。P6は、覆土上層に貼り床が一部残っており、住居址より以前のピットとも考えられる。またカマド脇のP5より、ほぼ完形の黒色土器碗が出土している。

本址の時期は、出土土器からみて古代13期(11世紀前半)と考えられる。

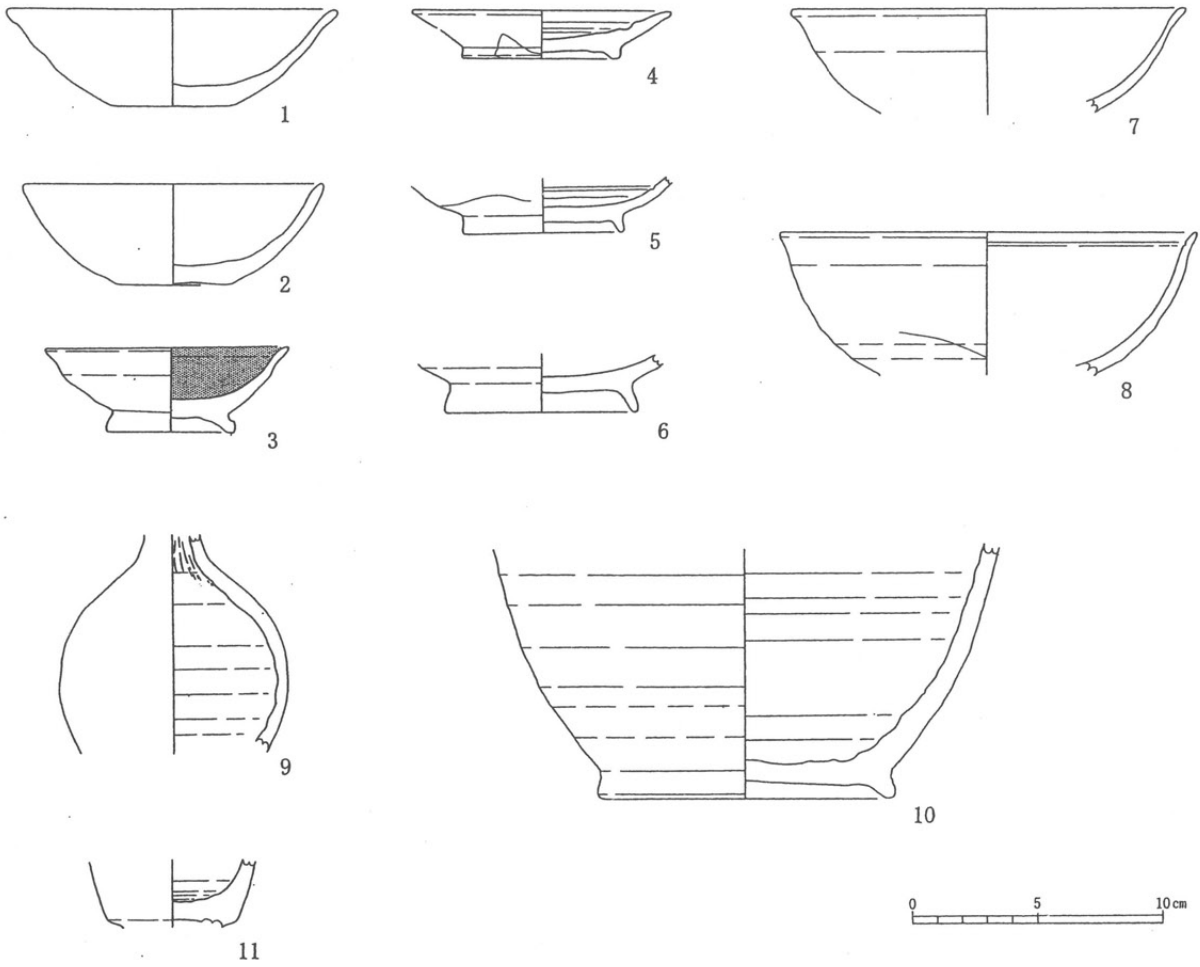
遺 物 1~3までが土師器で、1・2は杯、3は黒色土器碗である。4~11は灰釉陶器で、4は段皿、5~8は碗、9・11は小瓶、10は壺である。鉄製紡錘車も出土している。遺物の出土量は比較的少ない。



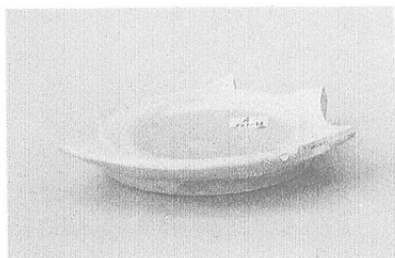
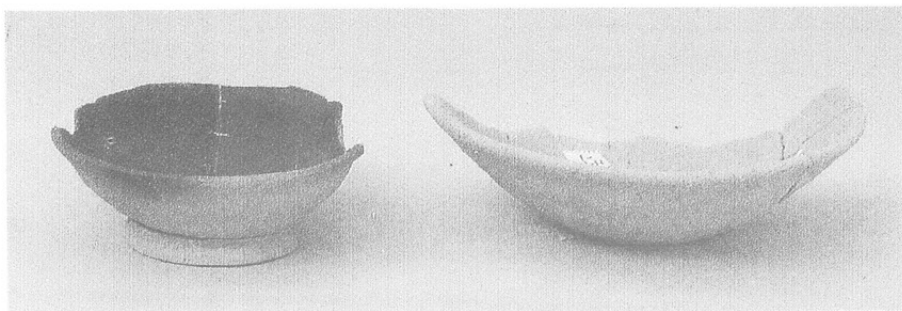
第4図 H-156号住居址



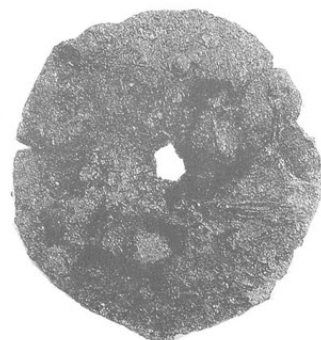
H-156号住居址(南より)



第5図 H-156号住居址出土土器



H-156号住居址出土土器



H-156号住居址出土鉄製紡錘車

H-157 号住居址 (第6・7図)

遺構 本址は調査区の南西、H-156号住居址の北、c・d・e-19~21グリッドに位置する。表土より24cm下位において、褐色土層の中に暗褐色のプランが確認された。住居址プラン確認後、東西南北にベルトを設定し、掘り下げを行った。

隅丸方形プランであったため古代の住居址と考え掘り進めたが、出土遺物から古墳時代の住居と推定された。本調査は「古代の農村」平安時代地区整備のための調査であるため、該期の住居址ではない本址は床面の検出までにとどめ、詳細な調査は行わなかった。

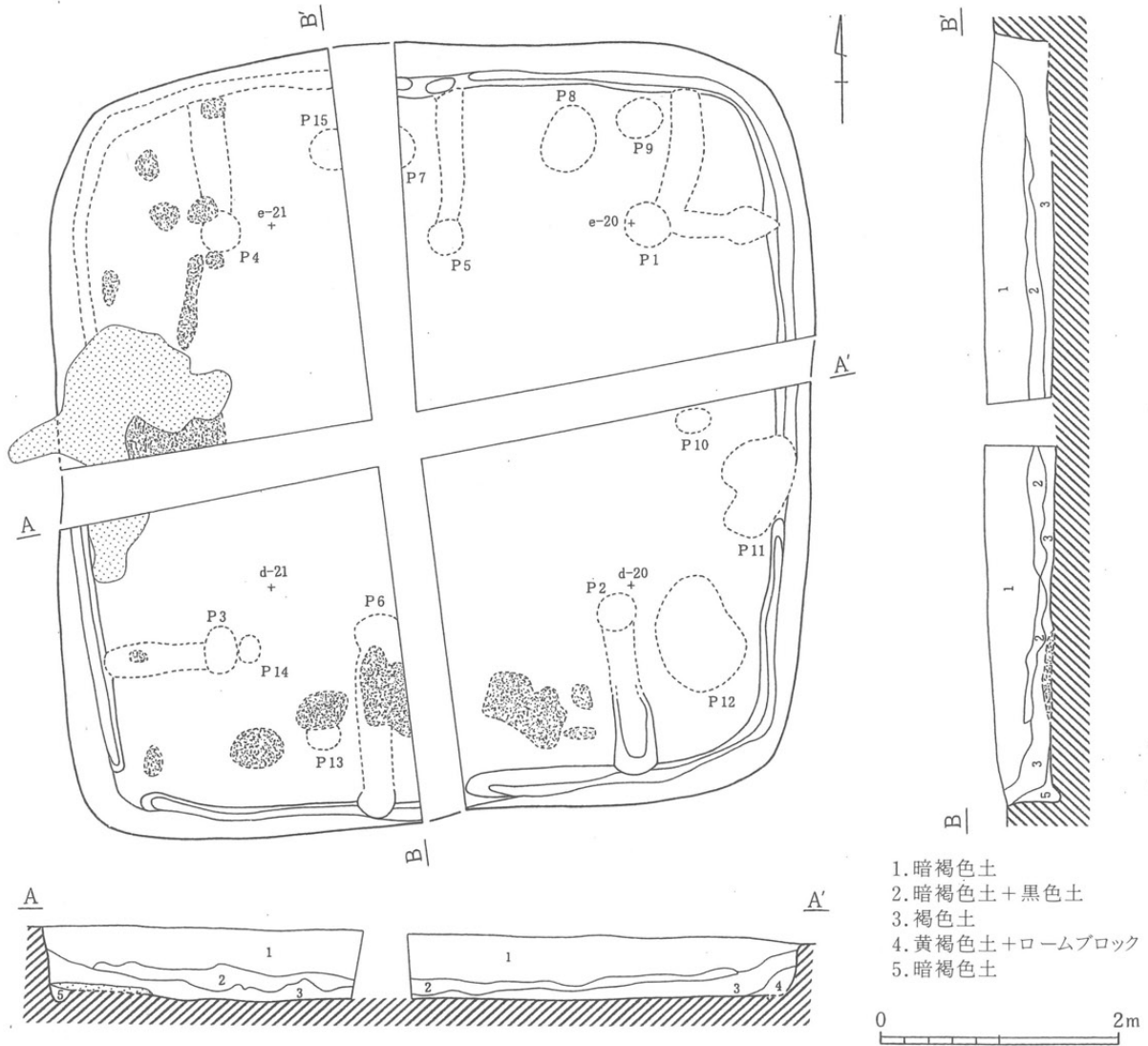
本址の規模は、東西6.32m、南北6.38mを測る、隅丸方形プランの住居址である。壁高は検出面より38~60cmで、壁の残りが良い。立ち上がりは垂直に近く、壁下に周溝が確認された。周溝は未掘であるが、全体を一周し、住居間仕切り用と考えられる溝が北壁から3本、南壁から2本、東西壁からそれぞれ1本、周溝から垂直に伸びているのが確認できる。ピットも未掘であるが、床面精査により18ヶ所検出し、その配置からP1~P6が支柱穴と想定された。

西壁中央付近に粘土と焼土の広がり確認できたことから、ここがカマドと推定される。カマド礫はあまり確認できず、形状も崩れていた。東西ベルトを跨いだ南側の床面近くからは土器が多く出土した。また、焼土塊が西壁から南壁にかけて、床上10cmの高さで点在していた。

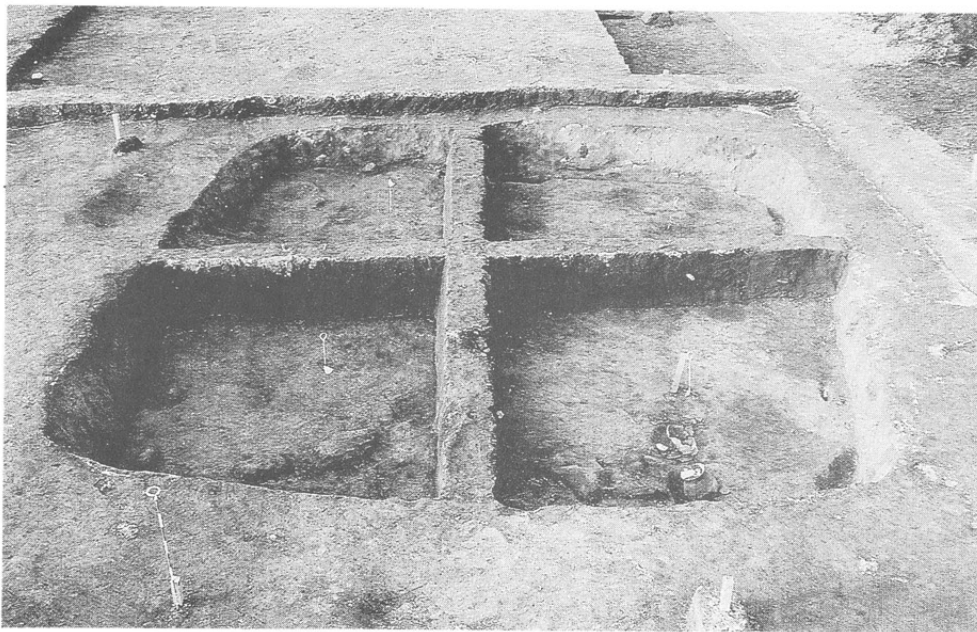
床は全体に平坦だが、やや軟質である。P2から南壁にかけての間仕切り用溝からは比較的残りの良い甕が出土している。

本址は出土遺物から古墳時代(6世紀前半)の住居址と考えられる。

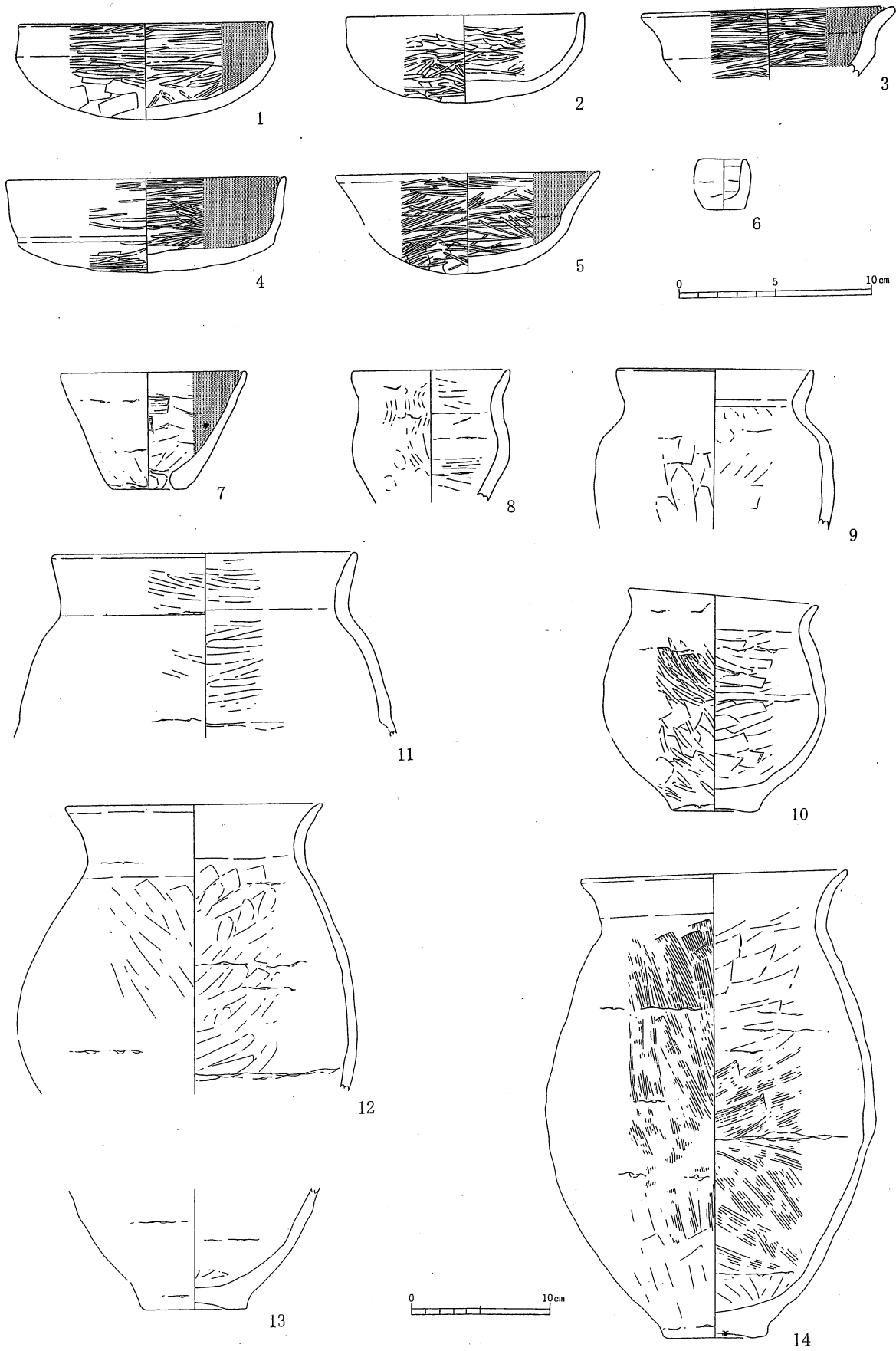
遺物 本址は今回調査された住居址の中では比較的多くの遺物が出土している。すべて土師器で、1~5が杯、7が甌、8~10が小型甕、11~14が甕、6がミニチュア土器である。



第6図 H-157号住居址

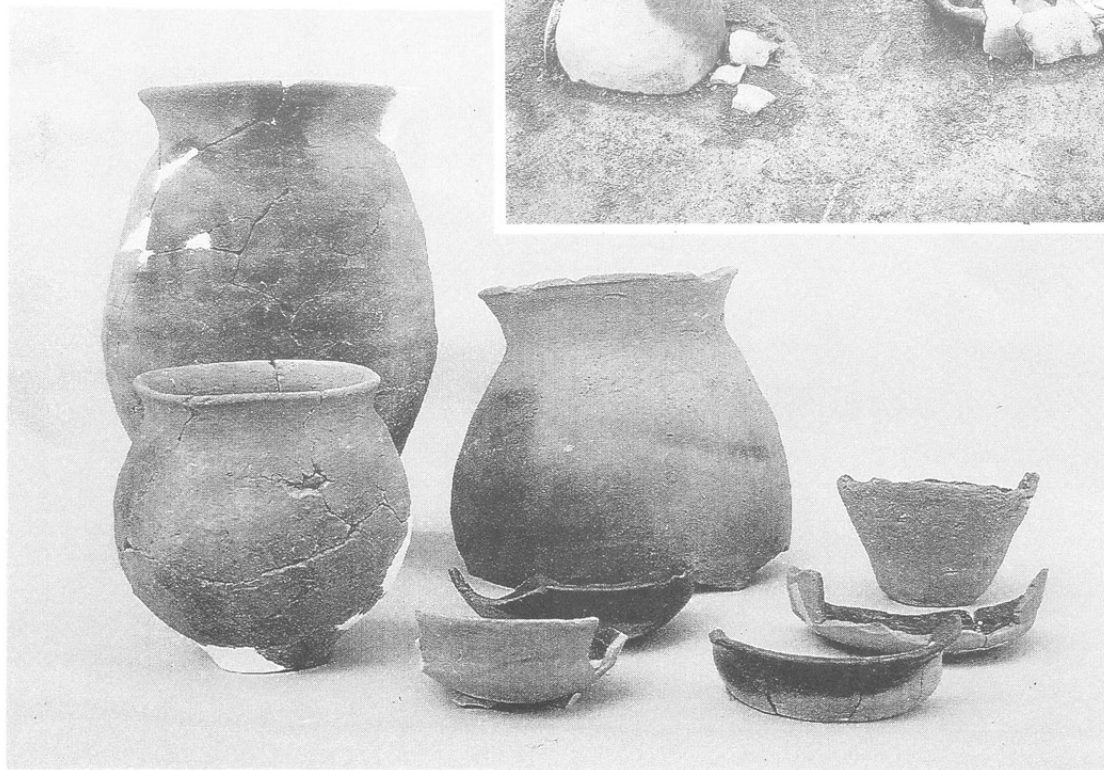


H-157号住居址(南より)



第7图 H-157号住居址出土土器

H-157号住居址遺物出土状況



H-157号住居址出土土器

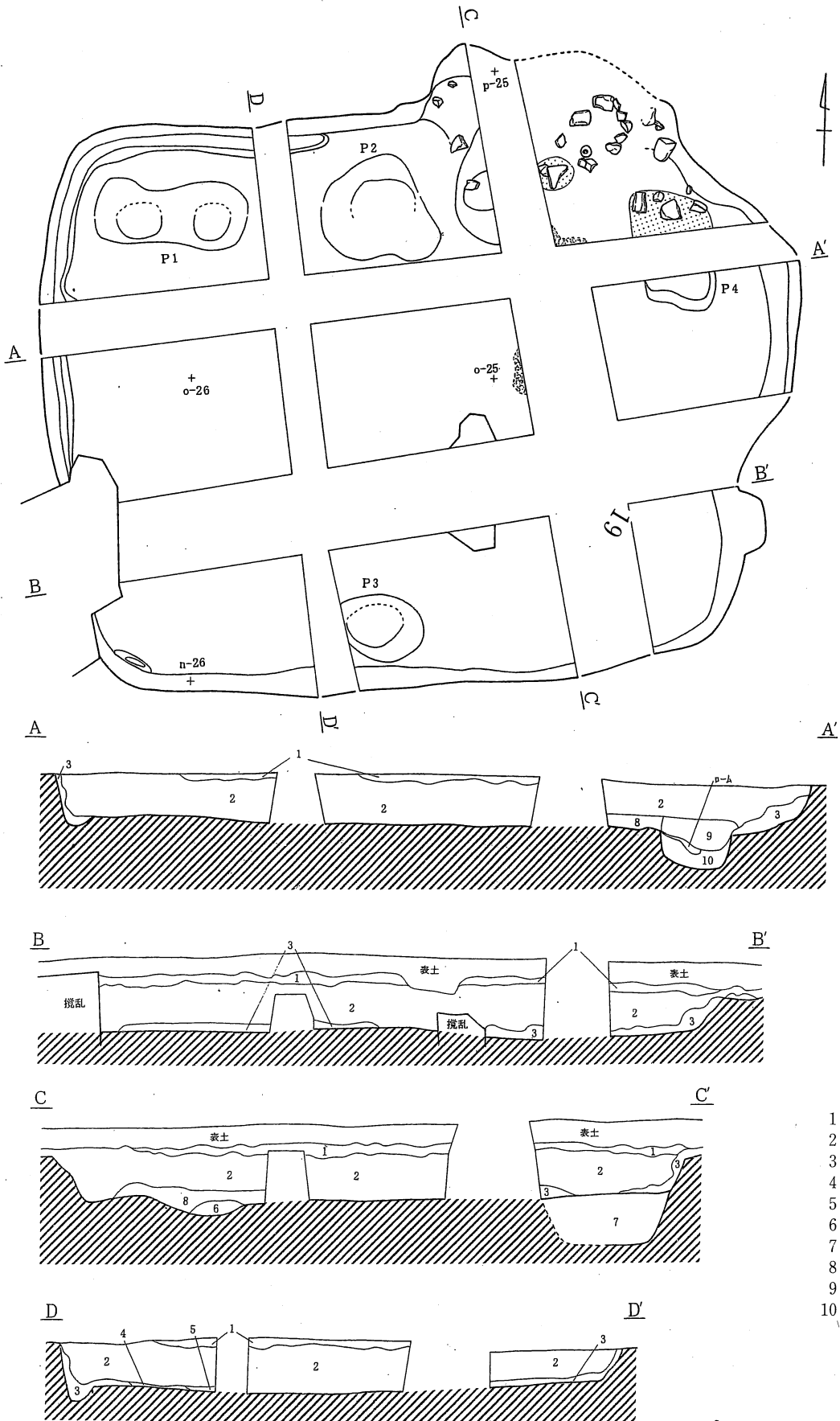
H-158号住居址（第8～11図）

遺構 本址は調査区北西部、J-70号住居址北にあり、n・o-24～26グリッドに位置する。地表面より26.5cm下位において、褐色土層中に暗褐色をした住居の輪郭が確認された。ローム層より6～12cm上位において検出された住居址プラン確認後、東西南北にベルトを2本ずつ設定し、掘り下げを行った。

本址の規模は、南北5.6m、東西6.5mを測るが、カマドと東壁側に張り出し部が設けられており、これを含めると南北6.28m、東西7.6mのやや形がくずれた隅丸長方形プランの住居址である。

壁高は検出面より30～67cmを測り、周壁はやや急な立ち上がりであるが、東壁張り出し部は緩やかな傾斜となっている。周溝は北西区画壁下から西壁の攪乱部まで残存している。深さは3～14cmほどである。

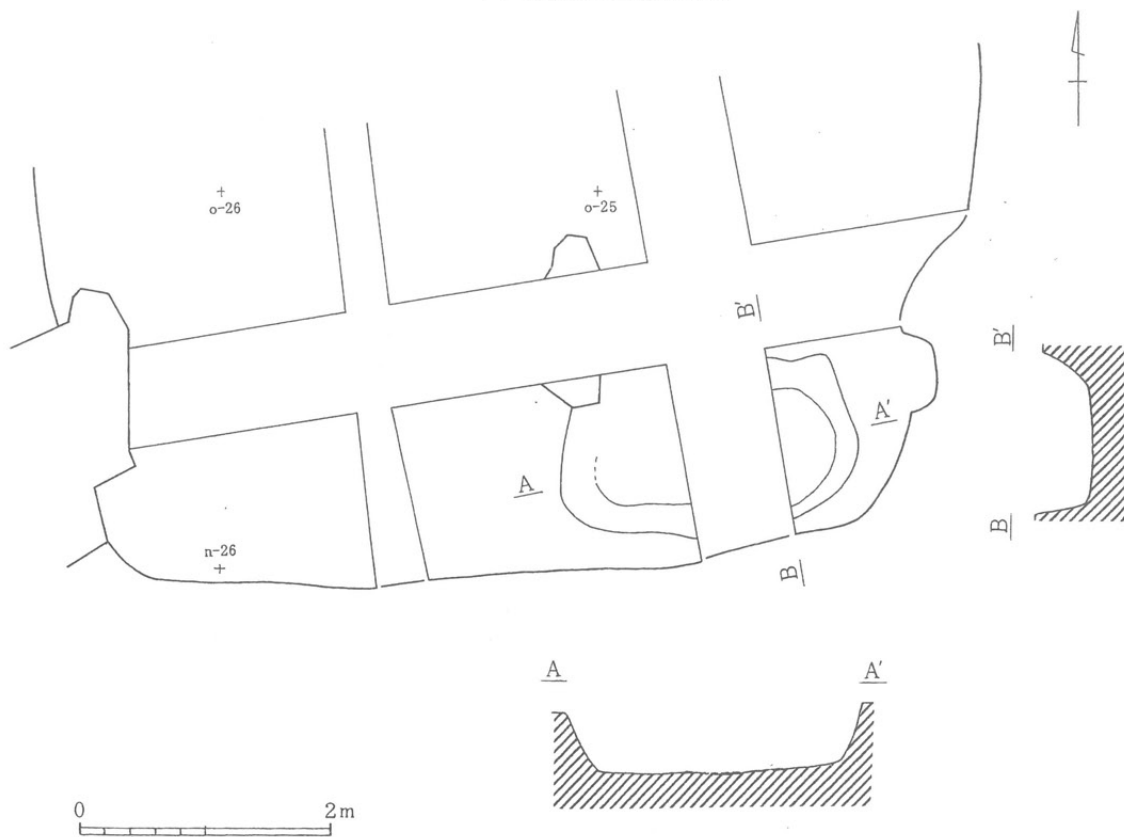
カマドは、北東部に礫や粘土・焼土の広がりがあることからこの位置にあったと推測されるが、崩落が激しく詳細は不明である。床面は比較的堅いが、住居址中央部から北壁下までが、特によく締まった堅緻な床である。カマドが存在したと思われる北東部は砂利・粘土粒・炭化材・焼土粒混じりの土が10cmほど堆積していたが、その下にはしっかりした床が見られた。南壁下は10cmほど高い堅い床面になっており、あるいは改築の名残とも考えられる。



第8图 H-158号住居址



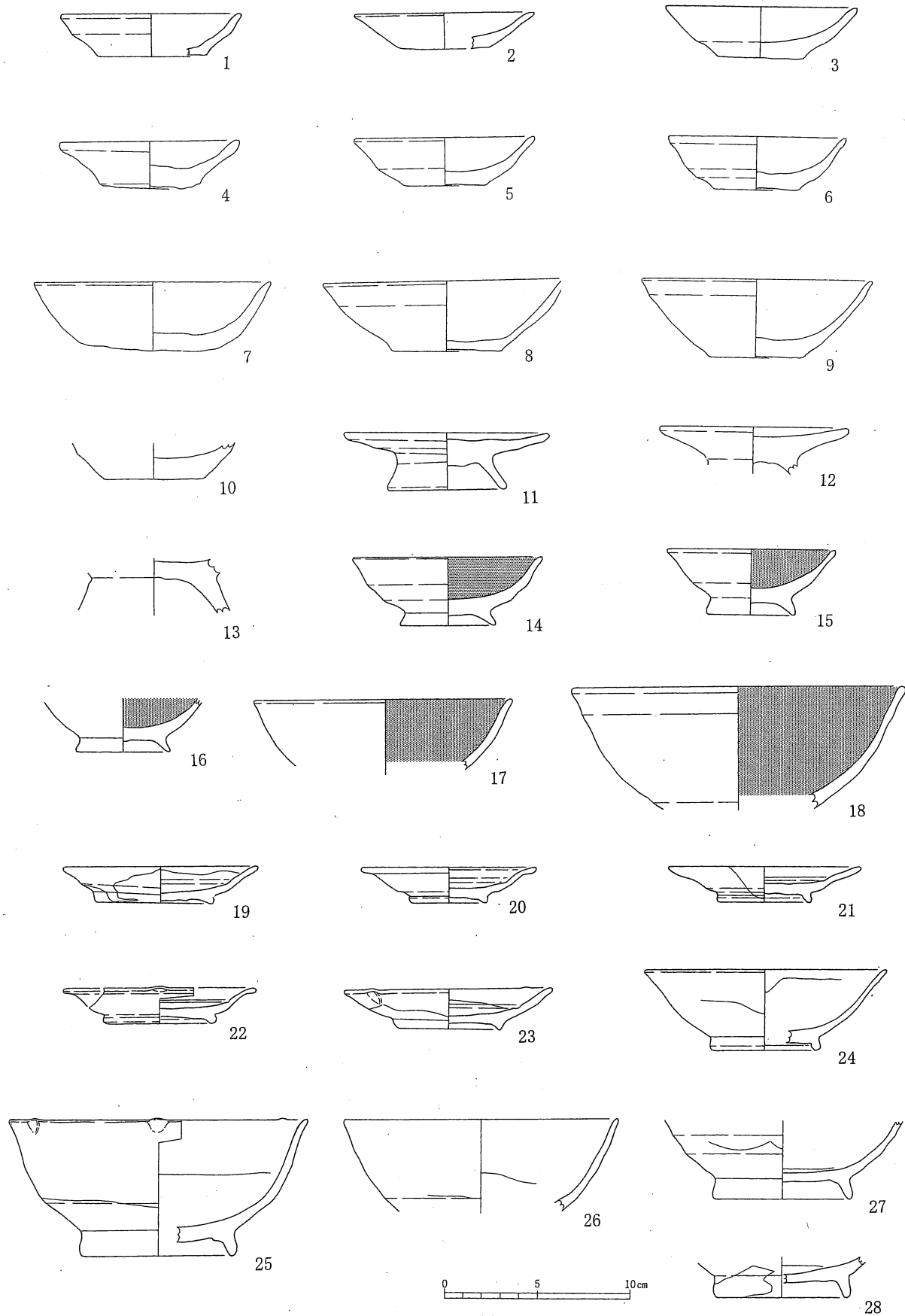
H-158号住居址(南より)



第9図 H-158号住居址内土坑

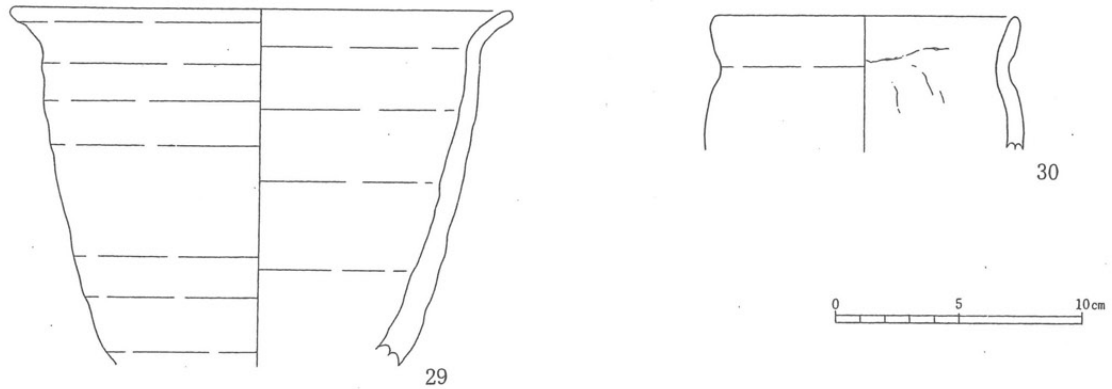
ピットは4ヶ所確認されたが、主柱穴は特定できなかった。南東隅に東西径 216cm、深さ 45cm の穴が存在するが、覆土上層は一部貼り床が残り、内部の土はロームブロックを多量に含む黄褐色土の単層をなしていたことから、なんらかの理由で一度に埋められたと考えられる。住居との関係は不明である。

本址の時期は出土遺物などから、古代 13 期 (11 世紀前半) と思われる。

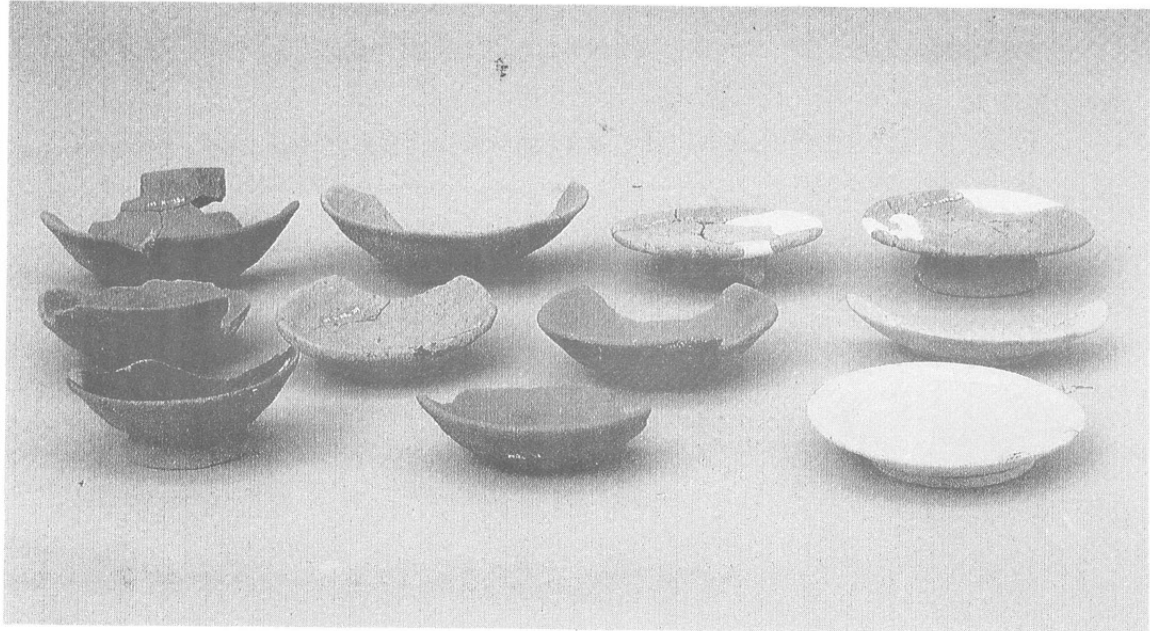


第10图 H-158号住居址出土土器 (1)

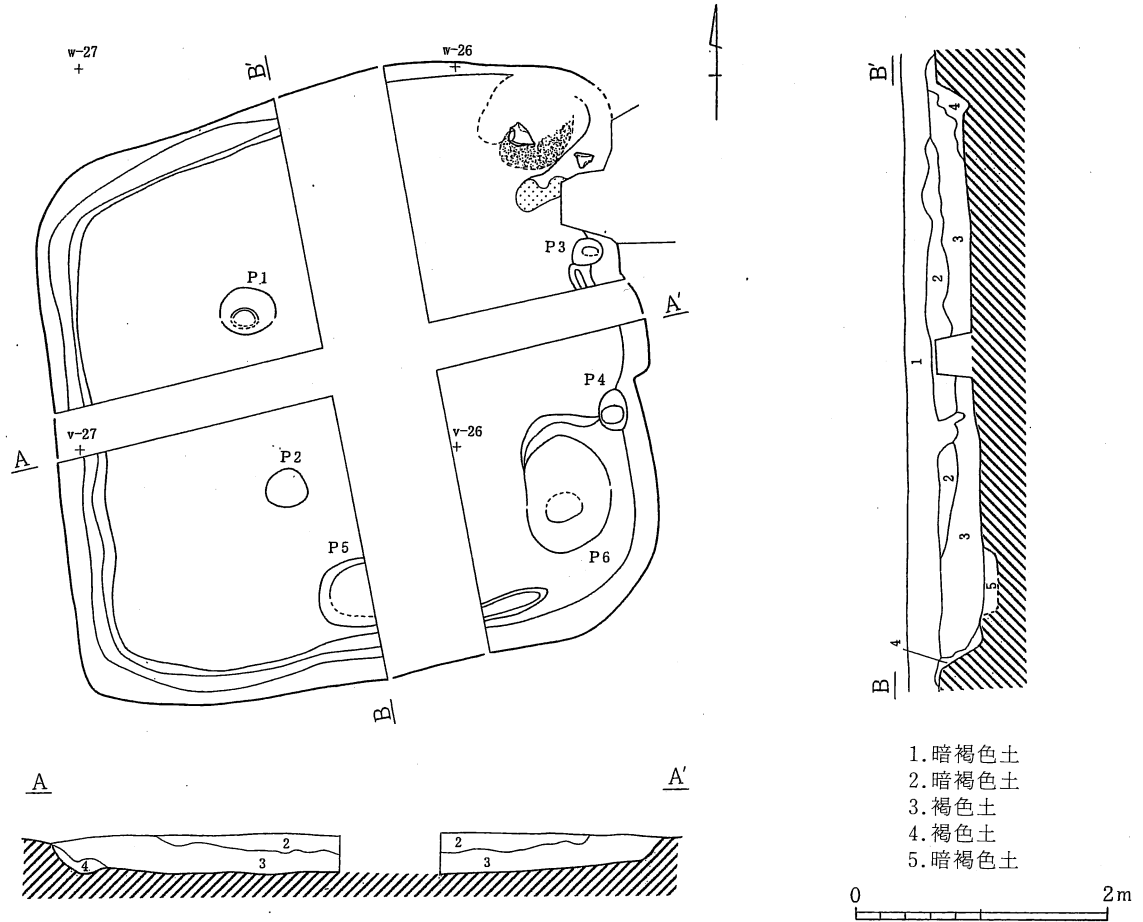
遺物 本調査では最大の住居址であり、遺物の量も多かった。1~18・29・30は土師器で、1~10が杯、11~13が盤、14~18は黒色土器の椀である。19~28は灰釉陶器で、19~23までが段皿、24~28が椀、そのうち22・23は輪花皿、25は輪花椀であった。19の段皿は完形で、カマドのものと考えられる礫近くから出土している。29は土師器鉢で、30が小型甕である。鉄製品も数点出土している。



第11図 H-158号住居址出土土器(2)



H-158号住居址出土土器



第12図 H-159号住居址

H-159号住居址（第12・13図）

遺構 本址は本調査区の最北にあり、u・v-25・26 グリッドに位置する。地表面より 28cm 下の暗褐色土層中に褐色をした住居の輪郭が確認され、ローム層より 6~12cm 上位において検出できた。住居址プラン確認後、東西南北にベルトを設定し、掘り下げを行った。

本址の規模は南北 4.68m、東西 4.65m を測る隅丸方形プランの住居址である。周壁はややゆるやかに立ち上がり、壁高は検出面より 21.5~31.5cm を測る。周溝は北西から南西区画にかけての壁下をめぐるが、南東区画には認められなかった。深さは 1~6.5cm ほどである。

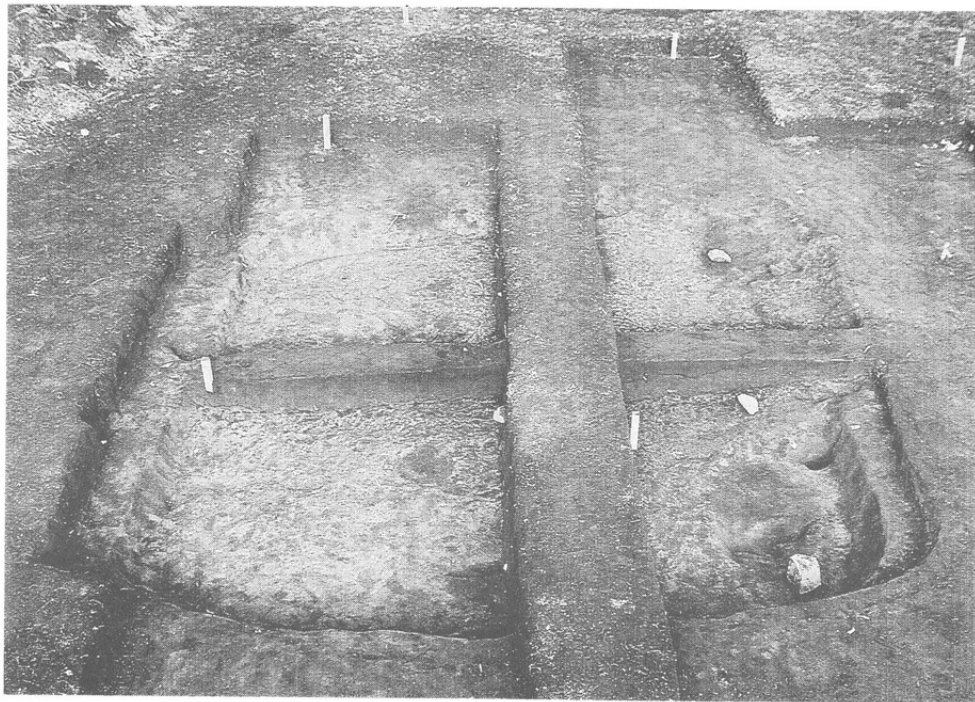
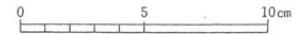
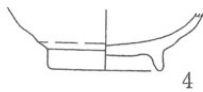
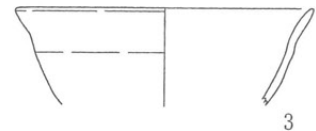
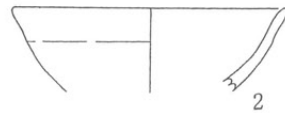
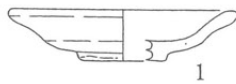
カマドは北東隅と考えられるが、住居址東の攪乱により、残存状態が悪い。床付近にはわずかに焼土と粘土がみられた。礫が多少遺存していたことから、石組みカマドと思われる。

床面は西側がやや堅い。また、東壁中央張り出し部は壁に向かってゆるやかに高くなっており、特によく叩き締められていた。

ピットは P1~P6 が確認された。P1~P4 が支柱穴と考えられる。大きさは P1・P2 が径約 38cm、P3・P4 は径約 23cm と比較的そろっており、深さは 45~58cm である。

本址は出土遺物などから、古代 13 期（11 世紀前半）であろう。

遺物 しっかりと掘りこみのなされた住居址であったが、出土遺物は少なかった。1・2 は土師器杯、3・4 は灰釉陶器碗である。鉄釘・鉄滓などの鉄製品も出土している。

H-159号住居址
(南より)

第13図 H-159号住居址出土土器

H-160号住居址 (第14・15図)

遺構 本址は調査区中央南、a・b-9・10 グリッド付近に位置し、地表面より 30cm 下位において、褐色土層の中に暗褐色をした住居の輪郭が確認され、ローム層より 8 cm 上位で検出することができた。住居址プラン確認後、東西南北にベルトを設定し、掘り下げを行った。また、本址は南壁が調査区外にあったため、ベルトを設定して新たに南にグリッドを設けたが、壁が確認できず、一部のみベルトを崩して南壁の確認を行っている。

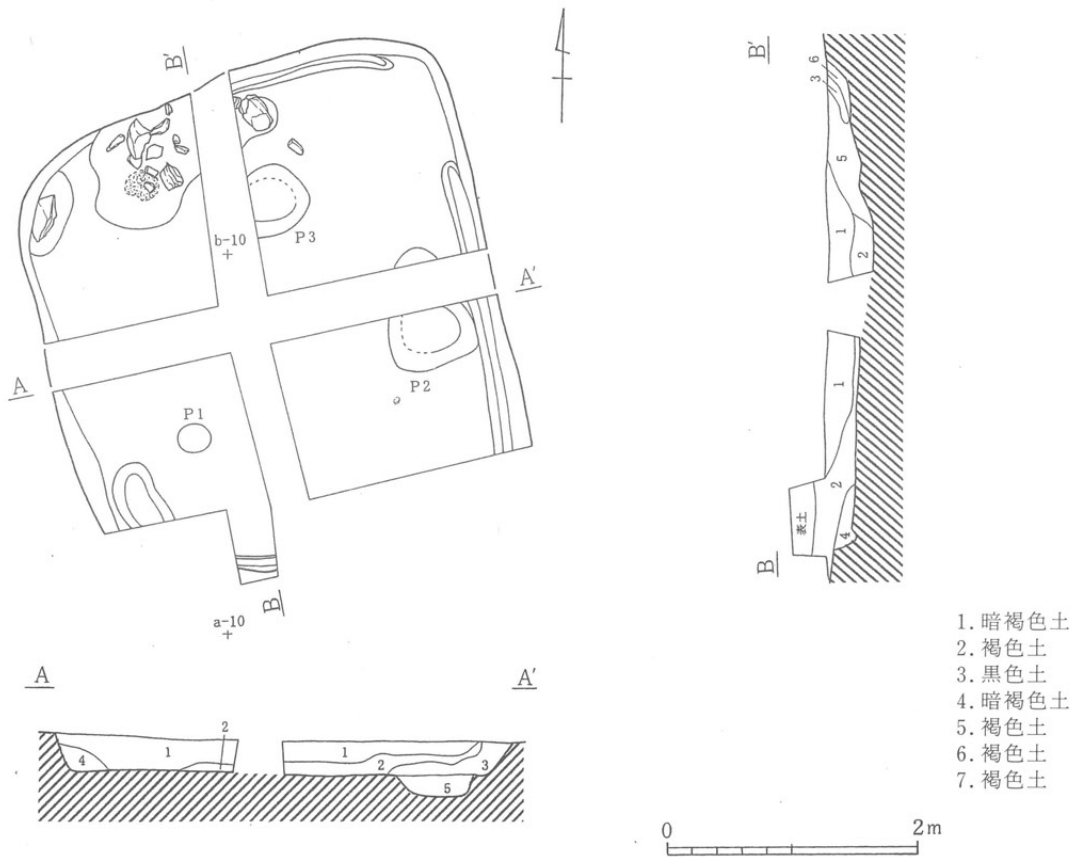
本址の規模は、南北 3.8m、東西 3.6m を測る隅丸方形プランの住居址で、本調査区では最小の住居である。壁高は検出面より 12~29.5cm で、西壁がやや高くなっている。立ち上がりはやや緩やかで、周溝は南西区画から、おそらくは南壁下を回り、東壁途中で途切れ、再度北東隅からカマドまで残る。深さは 2~5cm ほどである。

カマドは残存状態が悪く、石組みに使用されたとと思われる 20 cm 前後の礫が散らばり、粘土はなく、床面に焼土がわずかに見られた。床は全体に平坦で堅く締まっている。

ピットは P1~P3 が確認されたが、支柱穴は特定できなかった。P2 は覆土上層に一部貼り床が残っており、本址より古いピットとも考えられる。

本址の時期は出土遺物などから、古代 13 期 (11 世紀前半) と思われる。

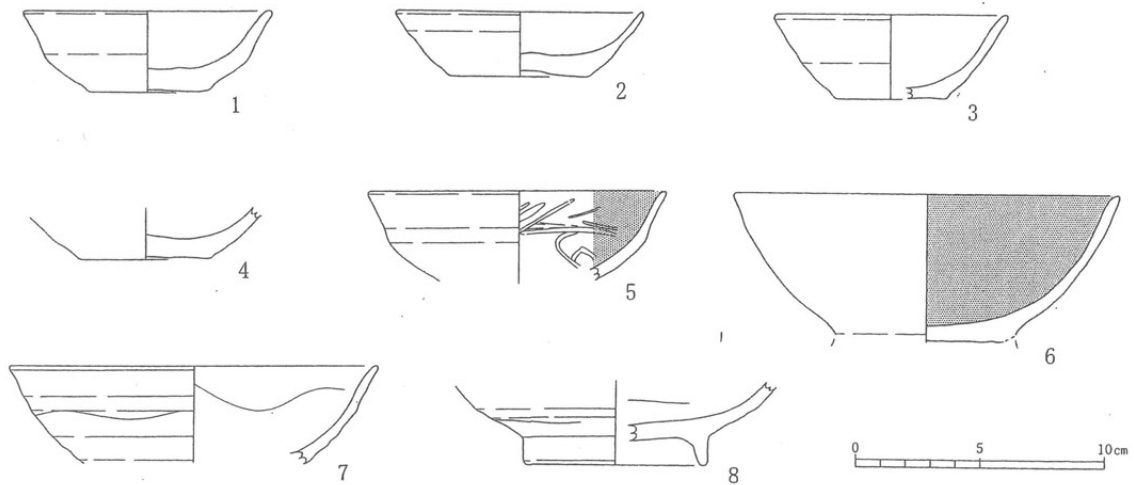
遺物 住居が小さかったため、全体的に遺物の量も少なかった。1~6は土師器で、そのうち1~4が杯、5が黒色土器の杯、6が黒色土器の椀、7・8が灰釉陶器の椀である。



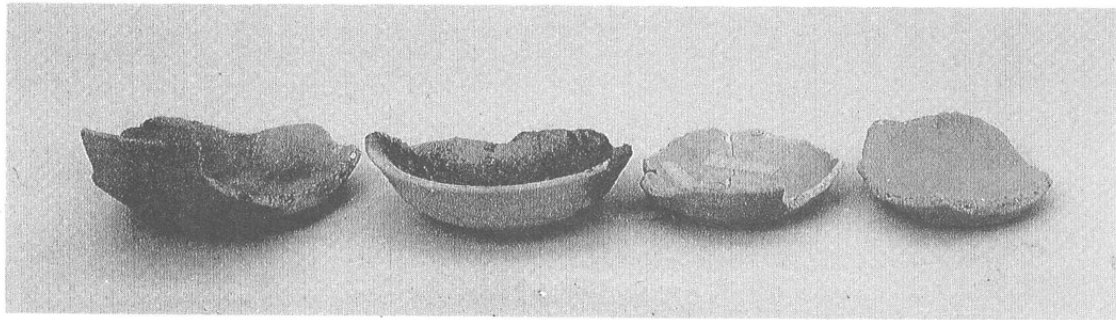
第14図 H-160号住居址

H-160号住居址
 (南より)





第15図 H-160号住居址出土土器



H-160号住居址出土土器

H-161号住居址 (第16・17図)

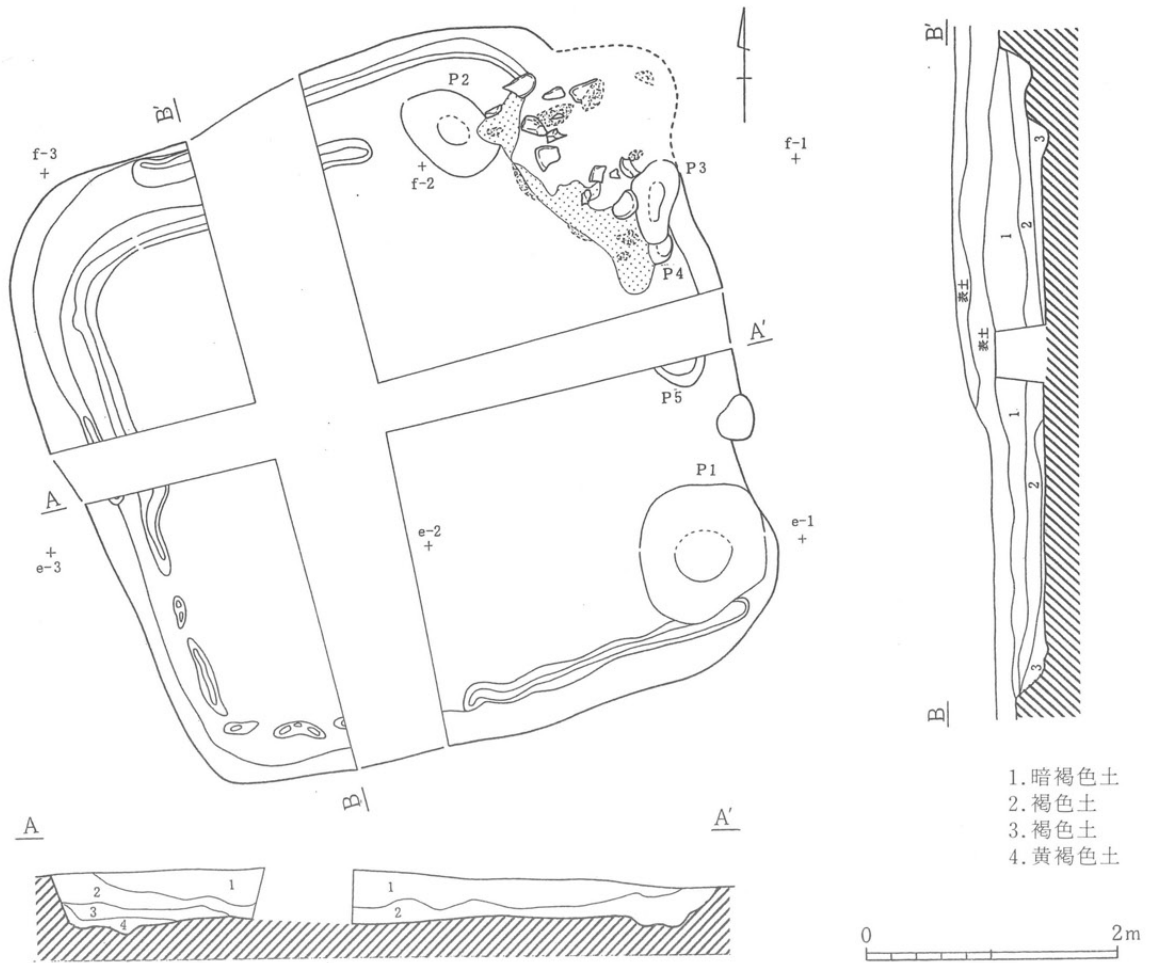
遺構 本址は調査区東端、d・e・f-1・2グリッド付近に位置し、地表面より20cm下位において、褐色土層の中に暗褐色をした住居の輪郭が確認され、ローム層より12cm上位で検出することができた。住居址プラン確認後、東西南北にベルトを設定し、掘り下げを行った。

本址の規模は、南北5.48m、東西5.22mを測る、隅丸方形プランの住居址である。壁高は検出面より21~39cmで、削平により南北で傾斜が大きい。東壁は調査区域外に位置したため、高さは不明である。立ち上がりはやや緩やかで、周溝は東壁下を除いて全体を巡っているが、南西区画は残りが悪かった。カマドの西脇から北壁・西壁中央部にかけては、周溝が二重になっており、その間には床面より高い位置で黒色土混じりのロームが確認された。ロームは床上12cmほどの高さで、東側にも存在したと思われる。住居プラン拡張の可能性も考えられる。周溝の深さは3~6cmほどである。

カマドは北東隅に設けられ、石組みの礫がよく残っていた。上層は筋状の攪乱が入っていたが、広い範囲に粘土が広がり、その下に焼土層が見られた。床面は全体に堅く、特に北半分はよく締まり、堅緻だった。

ピットは5カ所確認されたが、支柱穴は特定できなかった。

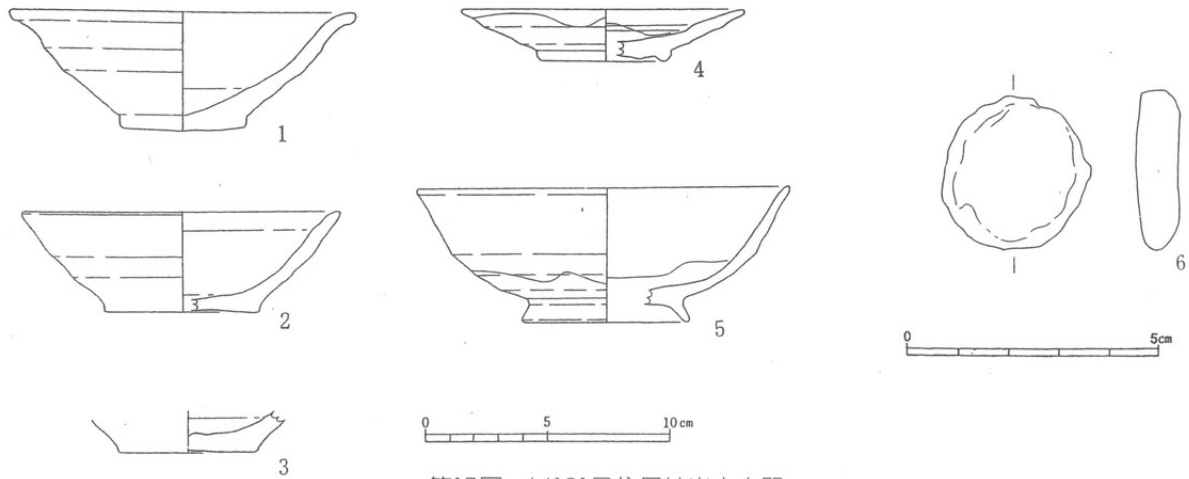
本址の時期は出土遺物などから、古代13期(11世紀前半)と思われる。



第16図 H-161号住居址

H-161号住居址
(南より)





第17図 H161号住居址出土土器

遺物 全体的に遺物の量は少なかった。1・2は土師器杯、3は土師器小型甕、4は灰釉陶器の段皿、5は灰釉陶器の椀である。土製円盤も出土している。

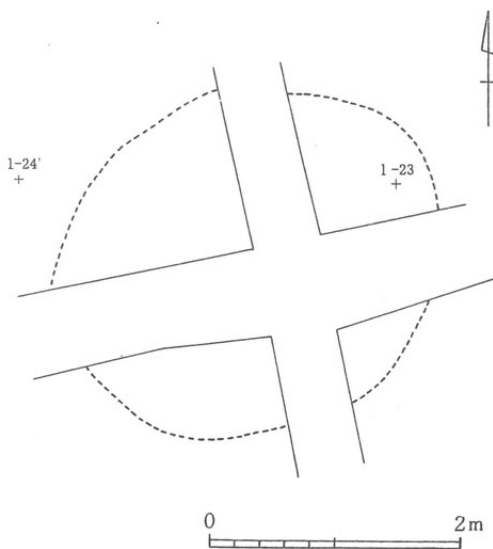
J-70号住居址 (第18図)

遺構 本址は調査区西部、k・1-23グリッドに位置している。表土を20cm掘り下げた褐色土層中に、やや色調の異なる暗褐色の住居プランが確認された。本址の規模は南北約2.7m、東西約3.2mの円形プランの住居址で、そのプランの形状や検出段階で上層面より出土した土器片から、縄文時代の住居と思われる。

本調査は「古代の農村」平安時代地区整備の事前調査であるため、縄文時代に属すると思われる本址の詳細な調査は実施しなかった。

本址の時期は、出土遺物から縄文中期初頭と考えられる。

遺物 調査対象時期から外れていたため一部を調査したにすぎず、縄文中期初頭の土器片が少量出土したにとどまった。



第18図 J-70号住居址



J-70号住居址 (南より)

遺構外出土遺物（第19～22図）

今回の調査でも遺構外から多くの遺物が出土したが、ここでは特に平出遺跡において出土例がなかった、もしくは少ない柄杓形土製品と土馬、磨製石鏃について述べてみたい。

①柄杓形土製品（第20図）

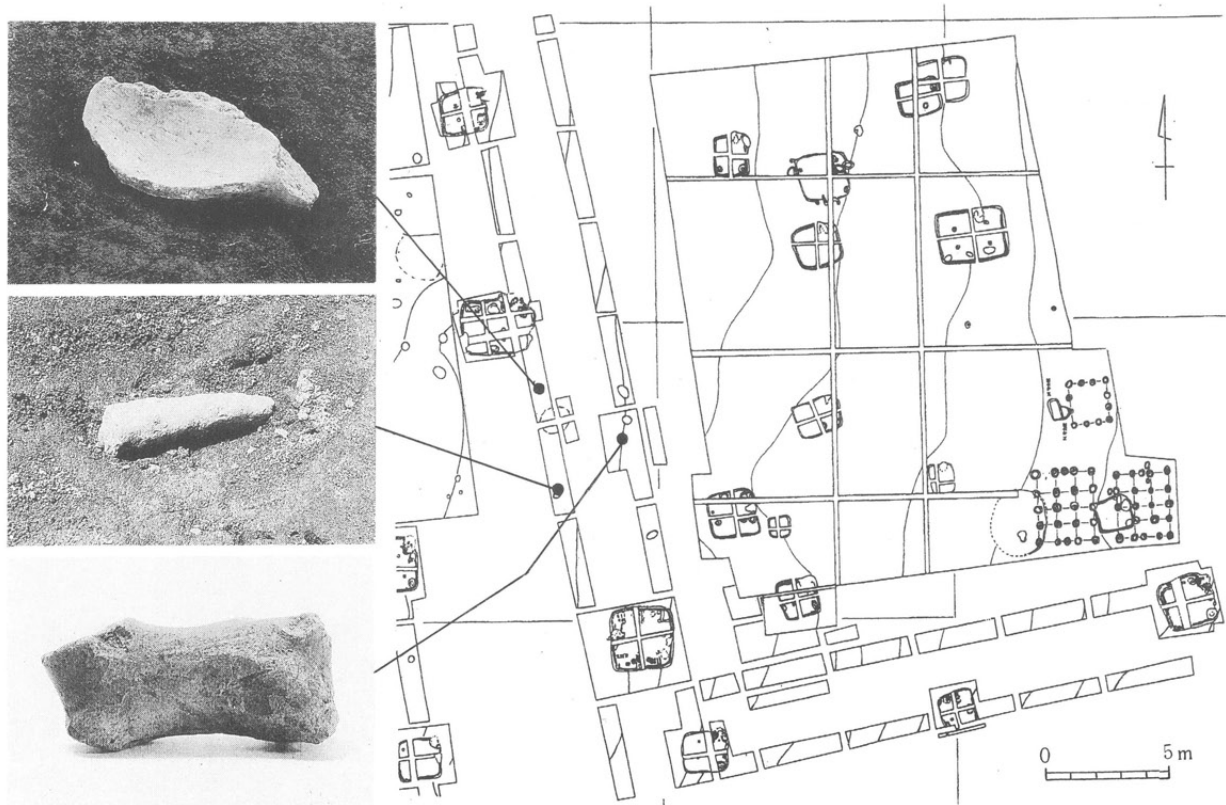
柄杓を模した土製品で、杓部は1-23グリッドの地表から30cmほど下がった地点で見つかり、柄部はi-23グリッドの地表から30cmほど下位の暗褐色をした落ち込みの上層から見つかった。出土場所は互いに10mほど離れていたが、整理調査の結果、柄と杓が一部接合し、同一固体であることが分かった。

杓部は幅8.0cm、長さ13.0cm、深さ4.0cmを測る。杓の先端の一部には口縁部が残っているが、そのほかは全体的に欠損している。柄部は径2.9cm、長さ12.0cmの棒状で、先へ行くほどやや細くなっている。両部とも赤褐色をした土器で、手捏製であるが、杓部の内部は縦位方向に磨いたような痕跡が残る。時期については、伴って出土した土器がないため特定できない。柄杓形土製品は全国的に見ても出土例は少なく、まして平出遺跡のような集落遺跡から見つかることはまれである。

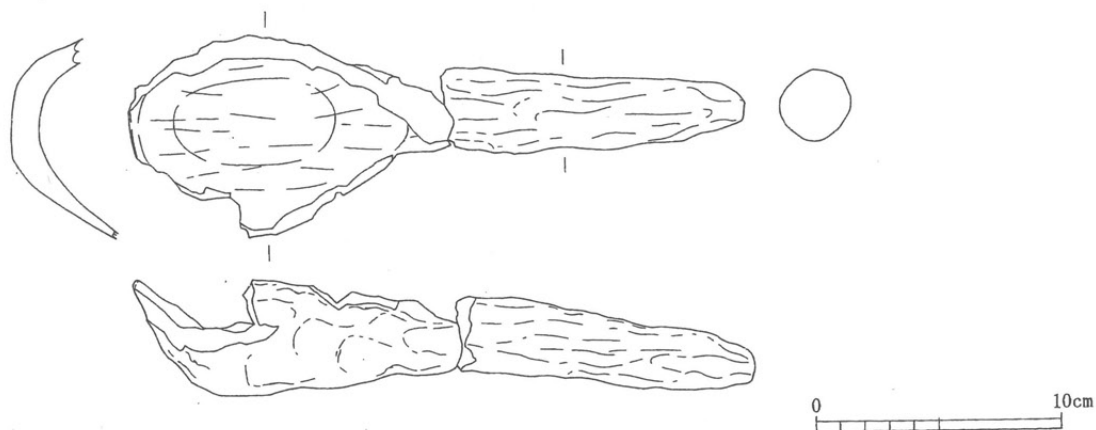
②土馬（第21図）

今回の調査で四本の脚を持つ何らかの動物を表現したと思われる土製品が1点出土したが、ここでは土馬として取り扱うこととした。なお、平成18年度調査において出土し、未整理だった土馬が1点あり、これも合わせて記述したい。

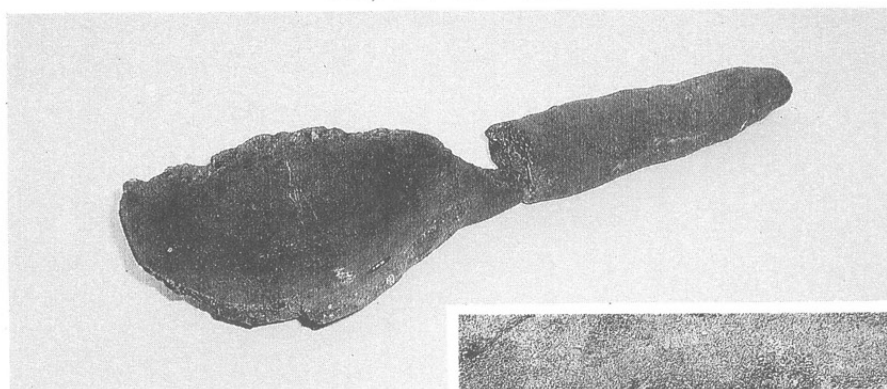
図21-1は今年度の調査で見つかったもので、k-21グリッド上層にて一括採取した遺物の中に混じっていた。上部2箇所、下部4箇所が欠損しているが、上部には頭部および尾部が、下部には前後脚部が付いていたと思われる。飾りの表現がない「裸馬」を表現したものと考えたいが、欠損部が多いため



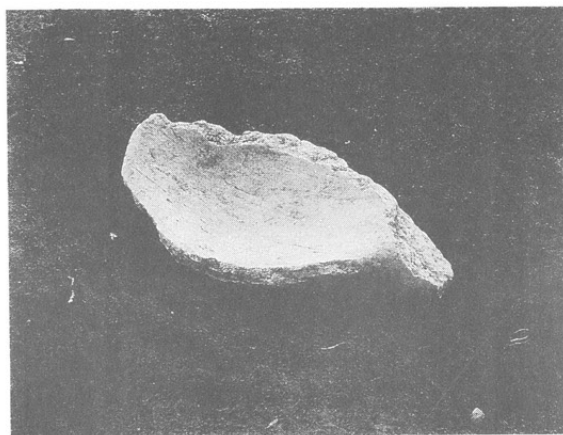
第19図 柄杓形土製品・土馬出土状況



第20図 柄杓形土製品



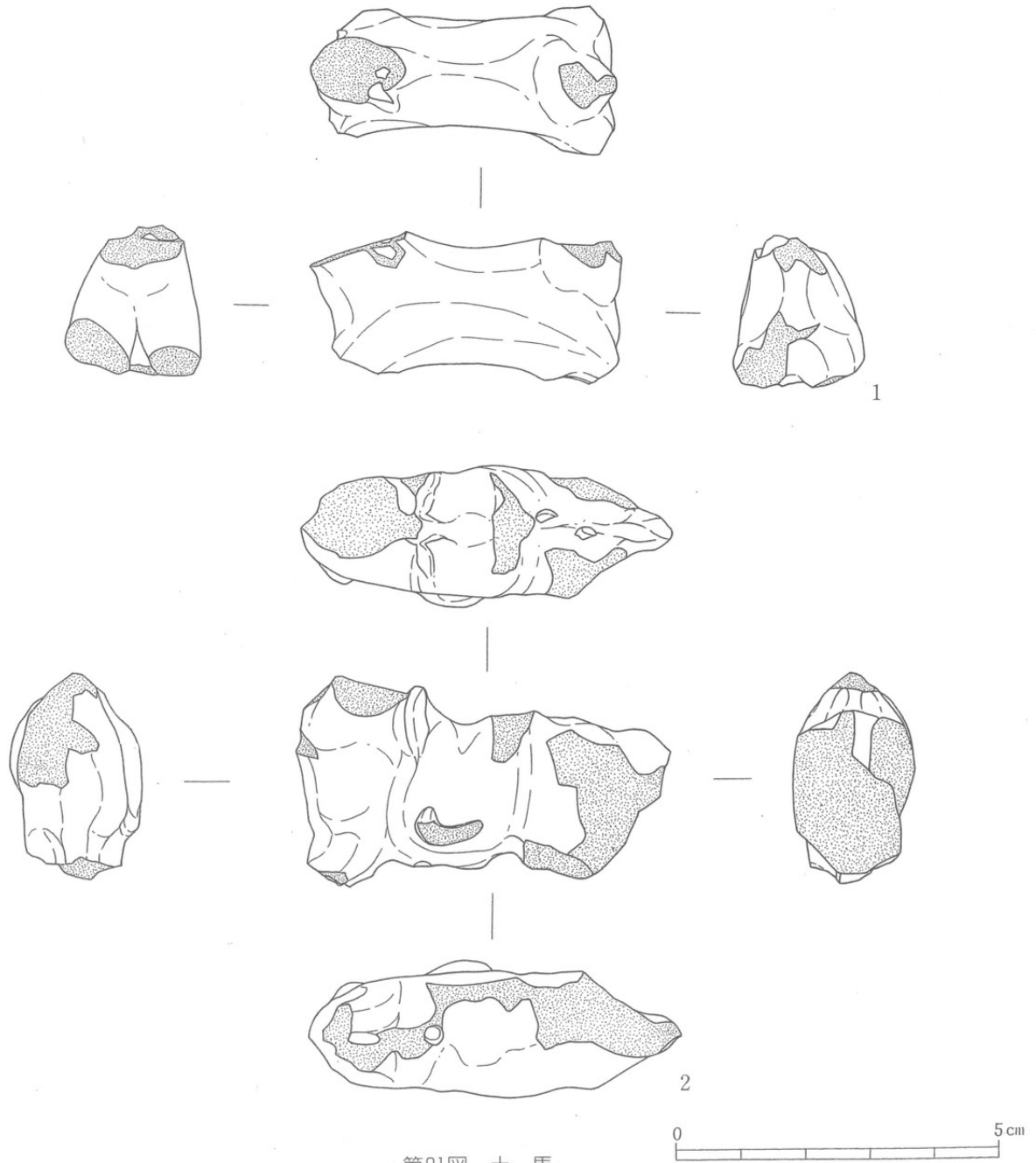
柄杓形土製品



柄杓形土製品出土状況(左:杓部・右:柄部)

馬であるかどうかは断定できない。図21-2は平成18年度調査において見つかった土馬である。いわゆる「飾馬」で、背にあたる部分には鞍、左側の胴部には鐙と思われる表現が施されている。出土場所や出土状態などは特定できない。長さ5.7cm、高さ3.2cm、幅1.9cmを測り、頭部、脚部、尾部と思われる部位が欠損している。裏側には1ヶ所穿孔がされているが、土馬を立てる際、この穴に棒状のものを通し、何かに刺すことによって固定したのだろうか。

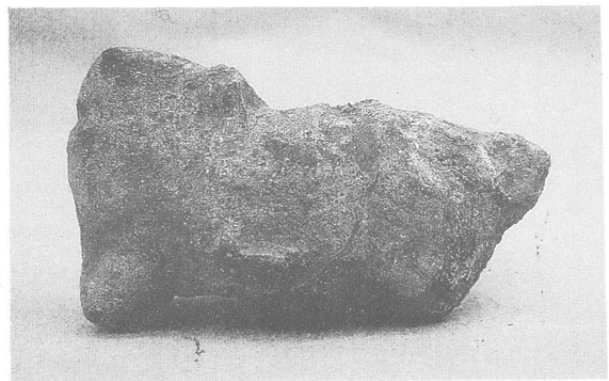
長野県史によると、県内における土馬については、諏訪市荒神山、同唐沢遺跡などで出土例がある程度で非常に少なく、出土状態も不明のものがほとんどである。今回紹介した2点の土馬も遺構外から一括採取した遺物であるので、残念ながら詳細な出土状態は不明である。時期についても特定できない。



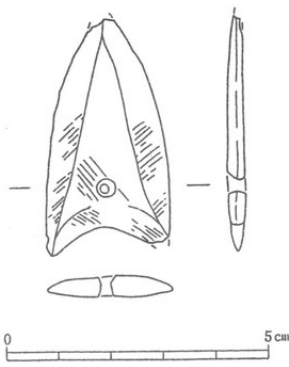
第21図 土馬



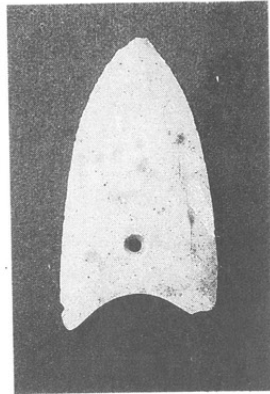
土馬 (平成19年度調査出土)



土馬 (平成18年度調査出土)



第22図 磨製石鏃



磨製石鏃

③磨製石鏃 (第22図)

c-14 グリッドから1点のみ出土した。石質は珪質粘板岩製で、全体的に研磨されている。長さ 4.5 cm、幅 2.5 cmを測り、断面は扁平で、基部は弧状に抉られており、中央下寄りに孔が一つ穿たれている。

磨製石鏃はこれまで平出遺跡において昭和 20 年代の調査で1点が見つかっただけで、今回が2点目となる。



発掘調査状況

6 古代の平出遺跡

古代平出の実態 昭和 20 年代からの半世紀にわたる発掘調査は、平出遺跡における古墳時代から平安時代にわたる実態をおぼろげながらも描き出すことを可能とした。

古墳時代から平安時代にかけての住居址は 161 軒確認され、各時代ごとの集落の動きがしだいに明らかになってきている。

2 世紀後半から 5 世紀の住居址は、遺跡中央から西側にかけて濃密に分布するが、5 世紀末から 6 世紀前半になると中央から西側を主体としつつも遺跡の東側にまで居住区域を拡大させる。そして 6 世紀後半から 7 世紀前半にはその居住域は再び遺跡中央から西側に縮小する。古墳時代の集落は遺跡の中でこのような動きを見せる。

しかし、次の 7 世紀後半以後およそ 300 年間にわたって住居址は発見されておらず、再び居住地とされるのは平安時代の 10 世紀前半になってからである。以後 100 年間、11 世紀前半にかけての住居址が発見されている。その住居址の分布状況をたどってみると、10 世紀後半までは中央から西側にかけて密度が高いが、11 世紀前半になると中央から東側にかけての地域に居住域が変化する。このように平安時代のムラは、当初遺跡の中央から西側の地域を中心に営まれていたが、しだいに中央から東側にムラの中心が移動していった状況が明らかになってきている。

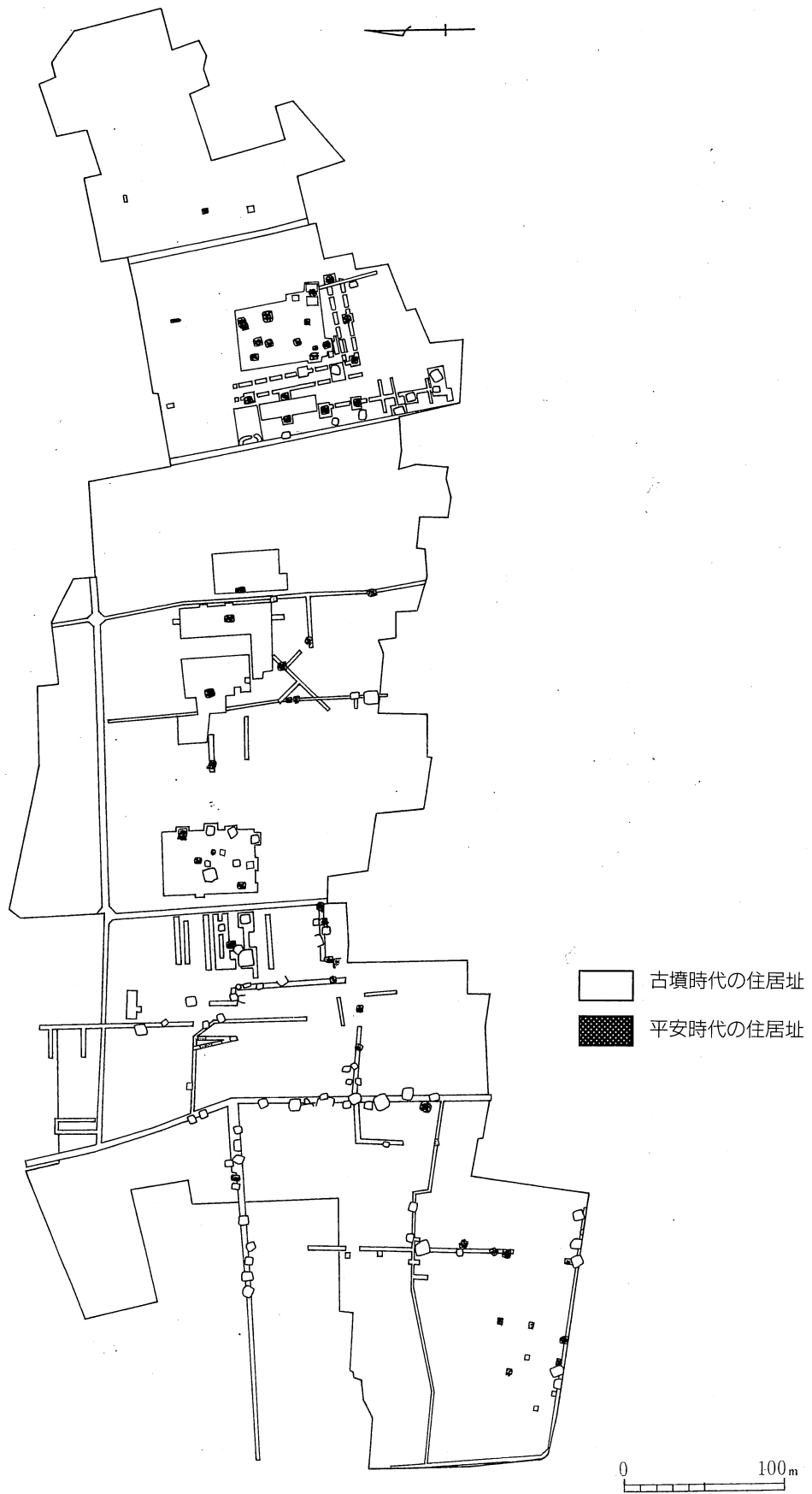
「古代の農村」平安時代地区の調査 「古代の農村」平安時代地区の整備のために平成 17 年度から 19 年度の 3 ヶ年にわたり発掘調査が行われた。この地域は昭和 20 年代にも小範囲の発掘調査が行われているが、今回の調査では平安時代の村落構成を明らかにするという目的のために既発掘の遺構も再調査することとした。確認された遺構は、縄文中期 3、古墳 5、平安 20 の住居址、掘立柱建物址 3、方形周溝墓 1 である。

古墳時代の住居址の調査では、住居を廃棄する際に出入口に穴を掘り、その周りに砂利を撒き、石製模造品等を用いた儀礼・祭祀を行っていた状況が確認された。住居の廃棄行為に関して注目すべき新資料を提供することになった。

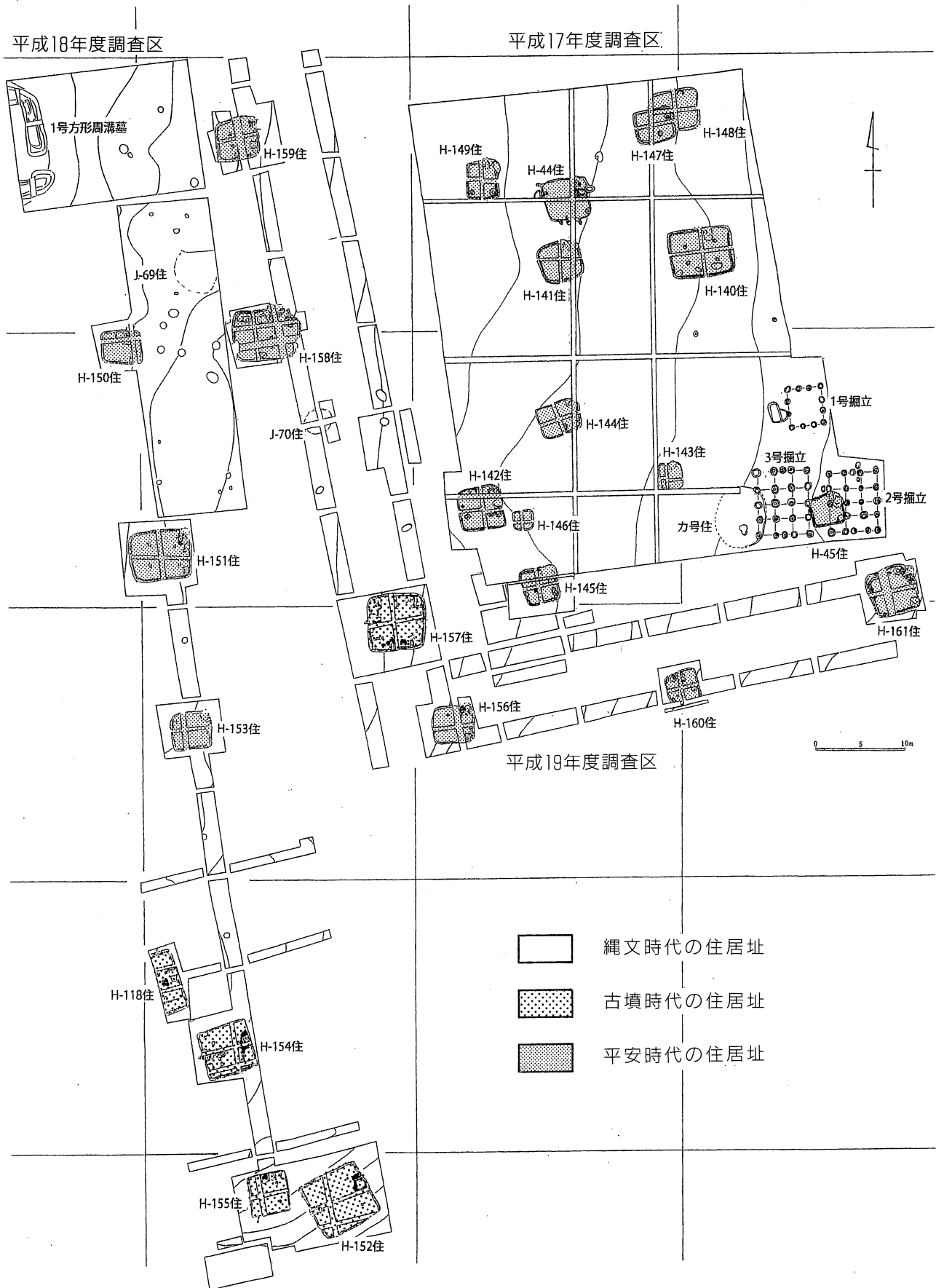
平安時代の住居址の概要は、遺構一覧表に示した。10 世紀後半には 148・160 号の 2 軒の住居が見つられただけであるが、11 世紀前半になると 17 軒もの住居が発見されている。

この 17 軒の住居は、11 世紀前半に成立したムラの状況をよく示している。このムラの実態を知る上で墨書土器のもつ意義は重要である。墨書土器が出土した住居址は、140 号(6 点)・141 号(1 点)・143 号(1 点)・145 号(1 点)・149 号(2 点)の 5 軒で、5 種類以上の墨書が出土している。墨書土器を保有するという共通の要素からこれらの住居が一つのムラを形成していたことが推定でき、墨書土器を 6 点ともっとも多く出土した 140 号がこのムラの核的住居であったことが想像される。また、再検討の結果、この 11 世紀前半の時期に比定可能となった 1 号掘立柱建物は、このムラに付随する納屋的性格を有するものと考えられることになった。

こうした調査結果をうけて、平安時代地区は 11 世紀前半のムラを整備することとし、140 号住居を中心とした農村景観を再現することになった。



第23図 古代遺構分布図



第24図 「古代の農村」平安時代地区全体図 (S-1:600)

平成17～19年度平出遺跡発掘調査検出遺構一覧

遺構名	所属時期	形態	規模(m)	火処	備考
H-44号住居址	平安時代 (11世紀後半)	方形	4.8 × 5.1	不明	昭和26年、平成17年度調査
H-45号住居址	平安時代	方形	3.5 × 3.6	石組カマド (北東隅)	昭和26年、平成17年度調査
H-118号住居址	古墳時代 (5世紀後半)	(方形)	7.12 × ?	不明	昭和61年、平成18年度調査
H-140号住居址	平安時代 (11世紀前半)	長方形	5.7 × 7.2	石組カマド (北壁中央)	平成17年度調査
H-141号住居址	平安時代 (11世紀前半)	方形	4.8 × 5.1	石組カマド (北壁中央)	平成17年度調査
H-142号住居址	平安時代 (11世紀前半)	方形	4.8 × 5.14	石組カマド (東壁中央)	平成17年度調査
H-143号住居址	平安時代 (11世紀前半)	方形	3.1 × 2.8	石組カマド (北壁東)	平成17年度調査
H-144号住居址	平安時代 (11世紀前半)	長方形	3.66 × 4.7	石組カマド (北東隅)	平成17年度調査
H-145号住居址	平安時代 (11世紀前半)	方形	4.0 × 4.0	石組カマド (北壁東)	平成17年度調査
H-146号住居址	平安時代 (11世紀前半)	方形	2.3 × 2.3	石組カマド (北壁東)	平成17年度調査
H-147号住居址	平安時代 (11世紀前半)	長方形	3.86 × 4.44	石組カマド (北東隅)	平成17年度調査
H-148号住居址	平安時代 (10世紀後半)	長方形	4.54 × 5.3	石組カマド (北壁東)	平成17年度調査
H-149号住居址	平安時代 (11世紀前半)	長方形	4.74 × 3.52	石組カマド (北壁東)	平成17年度調査
H-150号住居址	平安時代 (11世紀前半)	長方形	3.8 × 4.48	石組カマド (北壁東)	平成18年度調査
H-151号住居址	平安時代 (11世紀前半)	長方形	5.56 × 6.86	石組カマド (北東隅)	平成18年度調査
H-152号住居址	古墳時代 (5世紀後半)	方形	6.74 × 7.18	石組カマド (西壁中央)	平成18年度調査
H-153号住居址	平安時代 (11世紀前半)	方形	4.12 × 4.5	石組カマド (北東隅)	平成18年度調査
H-154号住居址	古墳時代 (5世紀後半)	長方形	5.6 × 6.2	石組カマド (西壁中央)	平成18年度調査
H-155号住居址	古墳時代 (5世紀後半)	方形	4.56 × 4.4	石組カマド (西壁中央)	平成18年度調査
H-156号住居址	平安時代 (11世紀前半)	長方形	4.1 × 4.7	石組カマド (北壁東)	平成19年度調査
H-157号住居址	古墳時代 (6世紀前半)	方形	6.3 × 6.4	石組カマド (西壁中央)	平成19年度調査
H-158号住居址	平安時代 (11世紀前半)	長方形	5.7 × 7.5	石組カマド (北東隅)	平成19年度調査
H-159号住居址	平安時代 (11世紀前半)	方形	4.7 × 4.7	石組カマド (北東隅)	平成19年度調査
H-160号住居址	平安時代 (10世紀後半)	方形	3.8 × 3.6	石組カマド (北壁中央)	平成19年度調査
H-161号住居址	平安時代 (11世紀前半)	方形	5.5 × 5.5	石組カマド (北東隅)	平成19年度調査
1号掘立柱建物址	古墳～平安時代	方形	4.25 × 3.9	—	昭和26年調査
2号掘立柱建物址	古墳～平安時代	長方形	6.6 × 5.4	—	昭和26年調査
3号掘立柱建物址	古墳～平安時代	長方形	7.3 × 5.7	—	昭和26年調査
1号方形周溝墓	古墳時代	方形	12.64 × ?	—	平成18年調査

7 「古代の農村」平安時代地区の整備計画

平成 17 年度から 3 ヶ年にわたった発掘調査は、「古代の農村」平安時代地区整備の資料を得ることを目的としている。整備計画の策定にあたっては、発掘調査の結果に基づき塩尻市史跡平出遺跡整備委員会によって検討され、方向づけされてきた。以下、平安時代地区の整備についてその概要を述べたい。

(1) 地形復元計画

「古代の農村」の集落景観を復元するうえで、どのような地形環境の中でその集落が成立していたかは重要な要素であり、当時の地形復元は整備の基礎ともなる。発掘調査の結果は、当時の地形は西側に向かって一定勾配（約 2%）で低くなっており、発掘調査前の現況地形と概ね同じ形状であった。調査区の西端と東端の高低差は 2 m 程度である。

地形復元整備にあたってはこの東側にむかって緩傾斜した地形を再現し、この上に住居復元や植栽によって当時の集落景観を造り出すことになる。

(2) 集落復元計画

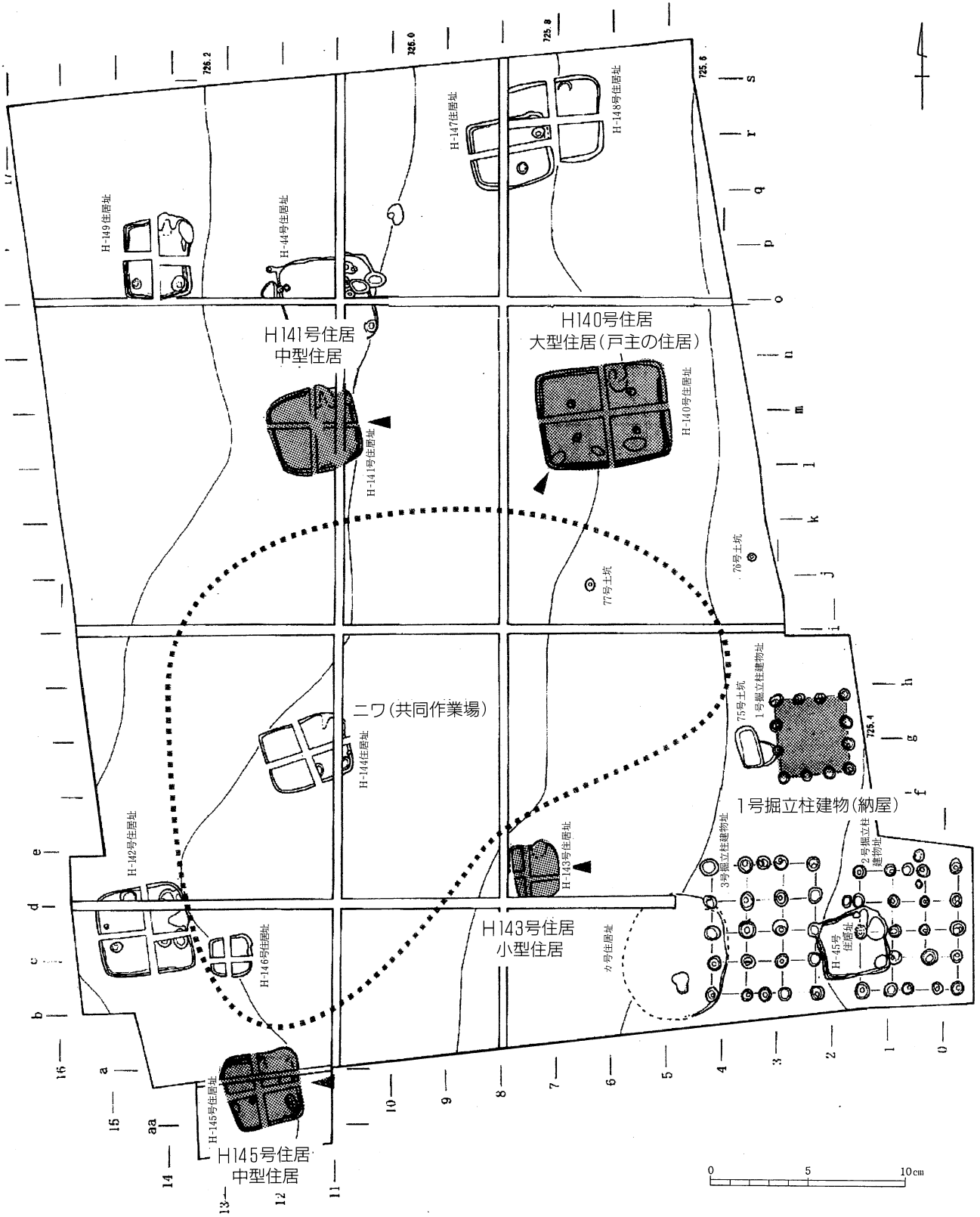
平出遺跡の平安時代集落は、10 世紀になって出現し 11 世紀前半には廃絶している。この時期の平出周辺における集落の動向をみると 9 世紀末から 10 世紀にかけて従来から存続していた田川流域の集落が消滅あるいは小規模化し、これに呼応するようにやや標高の高い東山山麓の山間地に多くの新しい集落が出現する。平出も周辺地域での新開地への進出動向と歩調を合わせるように新たな集落が造られたことになる。

平出遺跡の平安時代地区の整備にあたっては、このような田川流域での集落存廃の変革期に平出を新開地として移住してきた集団の集落と想定し、復元整備することとした。整備にあたっては、発掘調査でもっとも多く住居址が確認された 11 世紀前半を復元対象の時期とする。

11 世紀前半に属する 17 軒の住居址と同時期と考えられる 1 号掘立柱建物址の中から、住居址の配置状況、竈の位置、墨書土器の出土状況などを総合的に検討し、大型住居 1 (H140)、中型住居 2 (H141・145)、小型住居 1 (H143)、掘立柱建物 1 (1 号) の 5 棟の建物を復元することとした。そして、この 5 棟の建物が「一戸」を構成し、新開地に進出した人々のムラを再現することとした。

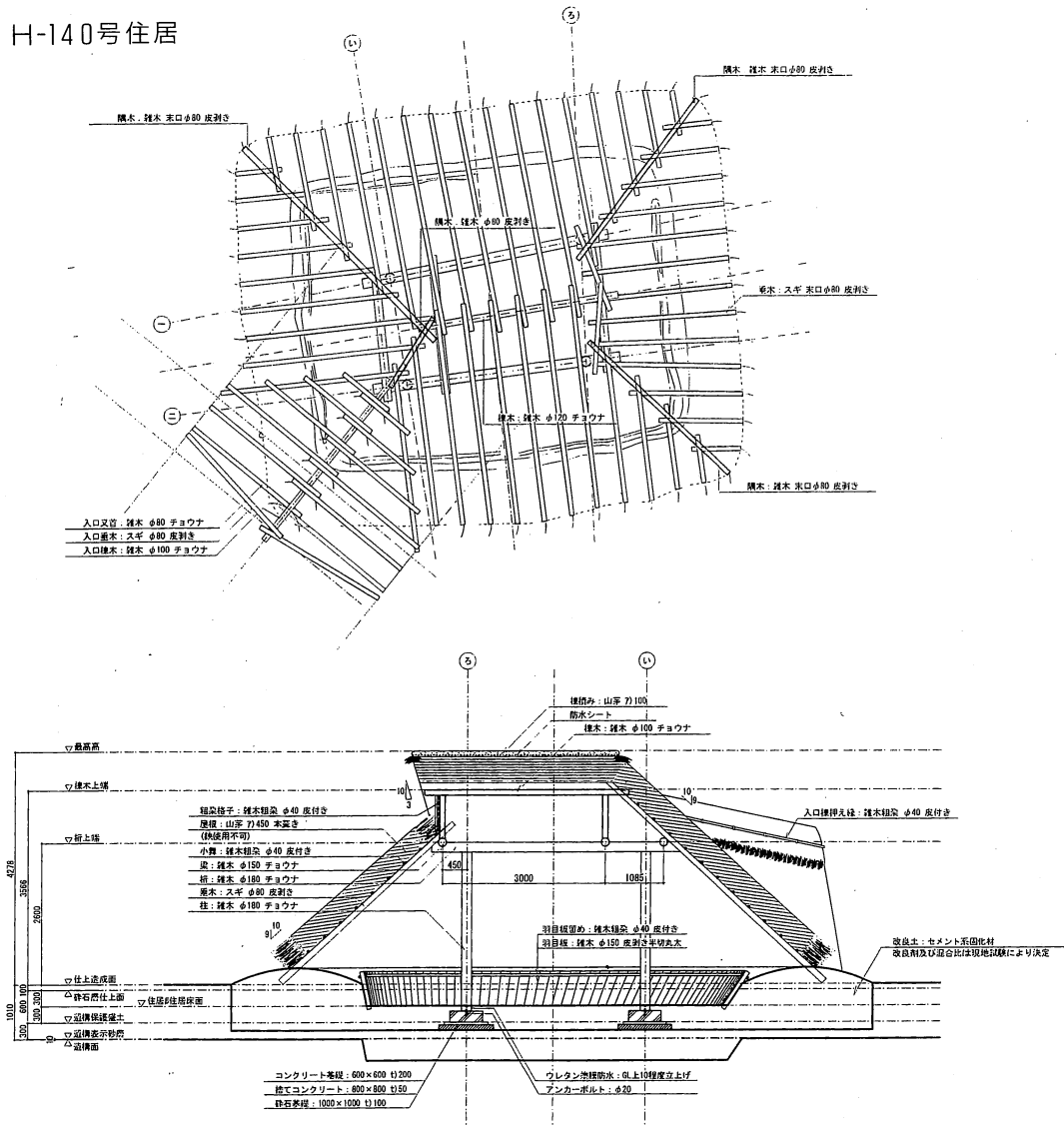
大型住居は戸主の家、中・小型住居は戸主以外の家族の家、掘立柱建物は納屋としての機能を有すると想定した。これらの建物が共同作業場としてのニワを囲むように配置されている。裸地となつているニワは、農作物の乾燥・脱穀などの収納作業を営む農家にとって必須の空間である。

建物復元の周囲は、古代の平出では畑作が中心であったことから畑地ゾーンを配置し、また、その外縁には近隣建物との緩衝帯としての植栽を行う修景植栽ゾーンを配することとしている。そして、建物の周囲には有用植物が繁茂し、生活臭のある景観の創出を目指すこととしている。

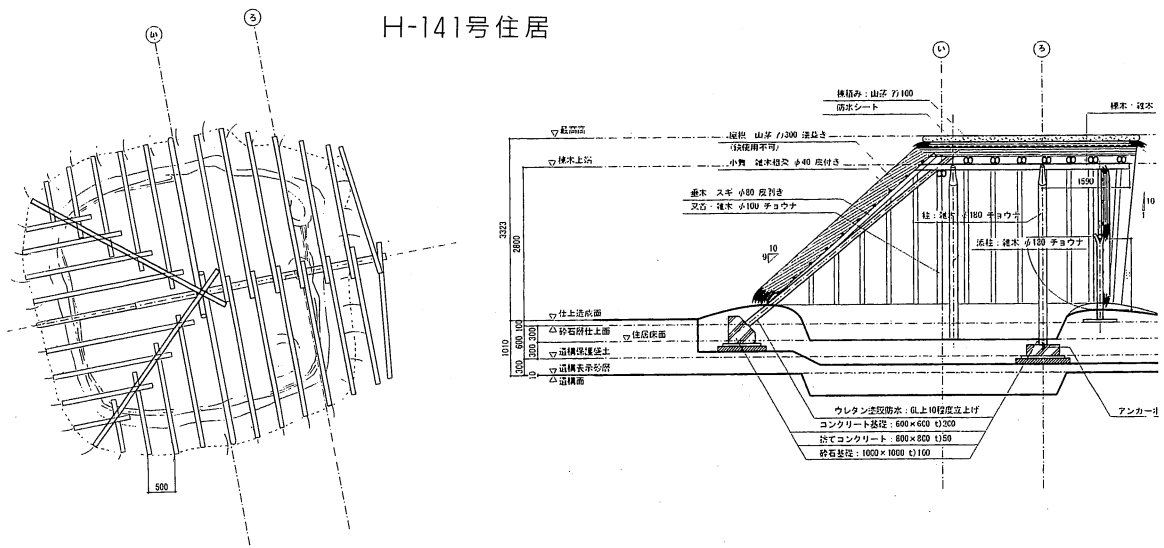


第25図 「古代の農村」平安時代地区復元建物分布図

H-140号住居

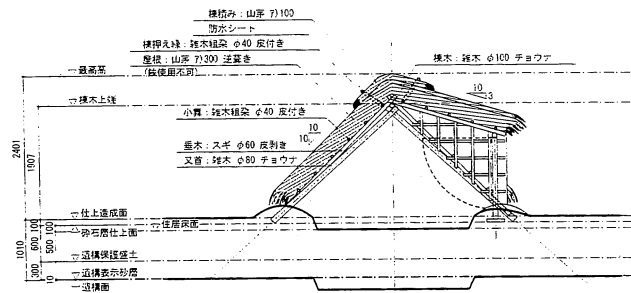
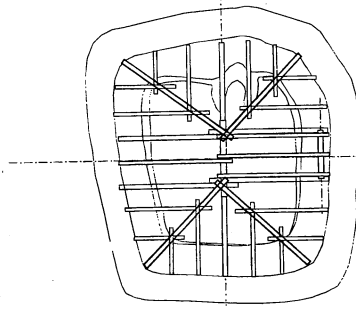


H-141号住居

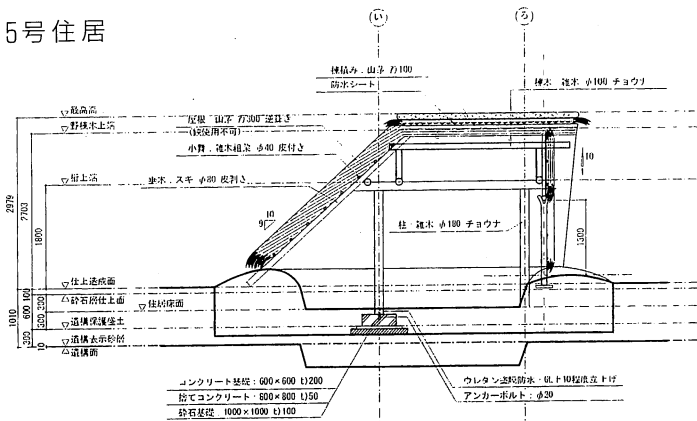
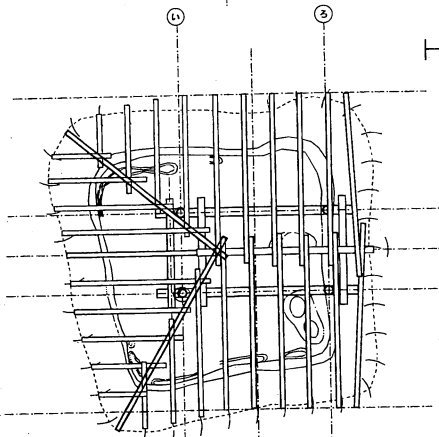


第26図 建物復元検討図(1) (S=1:100)

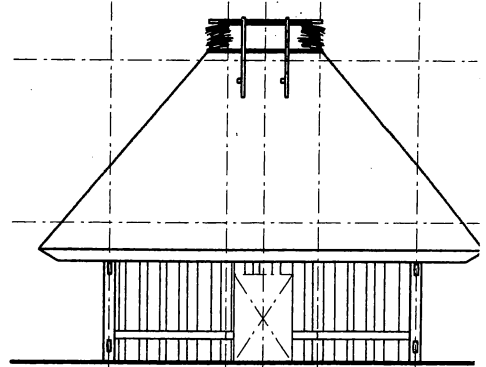
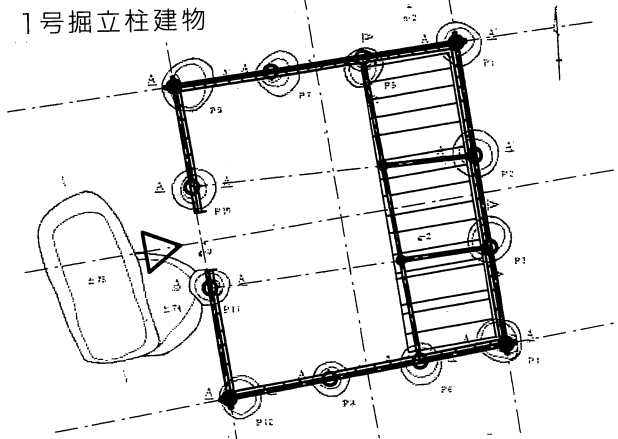
H-143号住居



H-145号住居

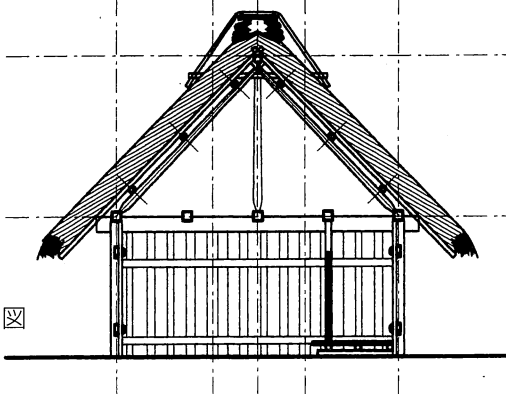


1号掘立柱建物

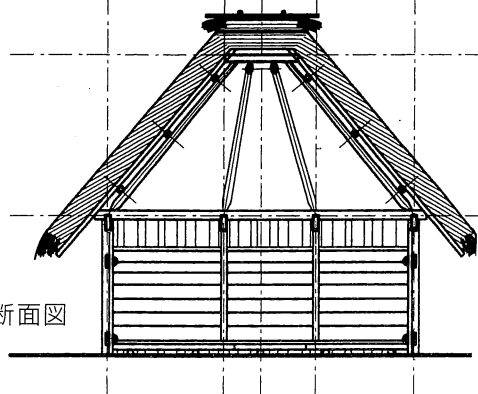


西立面図

梁間断面図



桁行断面図



第27図 建物復元検討図(2) (S=1:100)

8 ま と め

平出遺跡の平成 19 年度の発掘調査は、遺跡の東部地域に位置する「古代の農村」整備地区を対象として実施された。この一帯は平成 17 年度から発掘調査が行なわれており、その大きな目的は、集落復元が可能な平安時代の住居址の検出と、昭和 26 年度調査で確認されている住居址および掘立柱建物址の再検証であった。なお、平出遺跡指定地の中央付近にも「古代の農村」整備地区があるが、こちらでは古墳時代の集落が整備中であり、今回の調査区域周辺は同じ古代でも平安時代の集落復元を行う予定になっている場所である。

平成 17 年度調査では、12 軒の平安時代の住居址が見つかるとともに、昭和 20 年代に調査された縄文時代の住居址 1 軒、古墳時代から平安時代にかけてのものと思われる掘立柱建物址 3 棟の再調査も行われた。翌 18 年度には、縄文時代 1、古墳時代 4、平安時代 3 の住居址と、昭和 61 年度に一部が調査され、「溝状遺構」という名称で報告されていた、古墳時代の方形周溝墓が検出されている。そして今回の調査では、縄文時代 1、古墳時代 1、平安時代 5 の住居址、これに伴う多くの遺物が見つかった。なかでも平安時代の 5 軒の住居址は、いずれも 11 世紀前半に属するもので、これで 17～19 年度の調査でみつかった同時期の住居址は計 20 軒となった。この結果は、調査目的である平安時代の集落復元を行うにはとても良好な資料となるであろう。

遺物では、古墳時代のものと思われる柄杓形土製品や土馬が見つかったことが注目できる。両遺物の用途については未だ不明な点が多いが、いずれも祭祀に用いられたと考えられている。平出遺跡ではこれまでも古墳時代の遺構から、祭祀遺物と考えられている子持勾玉や石製模造品といった遺物がしばしば見つかっている。また、平成 18 年度調査では東壁中央付近に特殊遺構を伴った古墳時代の消失住居が 3 軒見つかっており、「住居廃棄に伴う祭祀」が行われた可能性が指摘されている。今回見つかった柄杓形土製品や土馬もこうした祭祀に関連する遺物の可能性もあり、村のなかでひんぱんに「まつり」が行なわれていた様子うかがえる。今回の調査区域において古墳時代は復元整備の対象となる時期ではないが、両遺物の出土は、改めて平出遺跡における古墳時代の祭祀の実態について考える貴重な資料となるだろう。

このように平成 17 年度から今回まで 3 ヶ年にわたって行われた調査では、古代の農村復元整備を進めていく上での貴重な資料を数多く得ることができ、平安時代集落の復元に大変有意義であったといえる。今後はこの調査結果をふまえて、見つかった多くの遺構の中から 5 棟の建物を復元するほか、周辺に畑地や植栽ゾーンを設けるなど、具体的な整備が行われていく予定となっている。はたして 11 世紀前半の平出集落の人々はどのような環境で生活をしていたのか？その様子が再現されるのが今から非常に楽しみである。

最後に、夏の炎天下や冬の厳冬の中、発掘調査に従事していただいた作業員の皆さまほか、調査に携わっていただいた多くの皆さまに感謝するとともに、厚く御礼申し上げます。

史跡平出遺跡発掘調査概報抄録

ふりがな	しせき ひらいでいせき							
書名	史跡平出遺跡							
副書名	平成19年度史跡等総合整備活用推進事業に係る発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	小林康男・塩原真樹・竹原久子・西窪美穂・三村孝子							
編集機関	塩尻市教育委員会							
所在地	〒399-0738 長野県塩尻市大門七番町4番3号 / Tel 0263-52-0280							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらいでいせき 平出遺跡	ながのけんしおじりしおおあぎ 長野県塩尻市大字 そらが 宗賀413-3他	20215	146	36° 6' 1"	137° 56' 54"	2007 7.19~ 2008 3.24	1.000㎡	史跡等総合整備 活用推進事業に 係る発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平出遺跡	集落址	縄文時代	竪穴住居址 1軒	縄文土器				
		古墳時代	竪穴住居址 1軒	土師器				
		平安時代	竪穴住居址 5軒	土師器・灰釉陶器・鉄 製紡錘車・鉄滓		11世紀前半を主体とした 平成時代の集落の広がり を確認できた		

史跡平出遺跡

—平成19年度史跡等総合整備活用
事進推事業に係る発掘調査概報—

平成21年3月28日発行

発行 長野県塩尻市大門七番町4番3号

塩尻市教育委員会

